

—“おまじない”をかけてくれたおじさんに、  
身も心も蕩けていく若おかみなのでしたっ—

# AVデビューで ☆若おかみ!

❀春の湯温泉催眠撮影ストーリー❀

AVデビューで  
★若おかみ!  
※春の湯温泉催眠撮影ストーリー※

「みなさんこんにちは！  
花の湯温泉・春の屋旅館の若おかみのおっこです！  
今日は旅館の宣伝の一環として、  
春の屋の『PRビデオ』の撮影が行われるのですが、  
その案内をあたしがさせていたたくんです！」



「おかみであるおばあちゃんが、  
若おかみ修行としてあたしに全部任せてくれて、  
うまくできるか、ちょっと緊張していますけど……  
どんな撮影になるのか、今からとっても楽しみです！」

「やあ、君が今日案内をしてくれる旅館の人かな?」

「は、はい、春の屋の若おかみです!」

今日はあたしが撮影のお手伝いを

させていただくことになりました!」

「若おかみさんか、うわさどおり、かわいい女将さんだね。

お名前を覚えてもらっても良いかな?」

「は、はい! 関織子と申します!」

がんばりますので、よろしくおねがいいたします!」



「織子ちゃんね、こちらこそよろしく。」

かなりの時間を撮影に付き合ってもらいたいんだけど、

若おかみさんは最後まで協力してくれるかな?」

「はい! 体力には自信があります!」

あたしでよろしければ、なんでもおっしやっってください!」

「ありがとう、それじゃあまずはテストも兼ねて、

簡単な挨拶から撮ってみようか。緊張するかもしれないけど、

いつもどおりにしてくれれば良いからね。」

「は、はい、どうぞ!」

「よし、それじゃあ、よーい…スタート!」

「……あつ、  
い、いらっしやいませっ、ようこそ、春の屋へ！  
春の屋の、わ、若おかみでございますっ！」



「……え、えっと……！  
え、遠路はるばる、  
本日は、ごゆるりと、  
お、おくつろぎくださいませっ！」

「……うん、元気があって良いね！」

オープニングはばっちりだよ。

織子ちゃんがどういう女の子なのか、

良く分かる映像になったよ。」

「あ、ありがとうございます！」

「でもあたし、けっこう、かんじやいましたけど……！」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

「そういう女の子の方が好きな人は多いからね。」

「そ、そうですか……？ す、すみません！」



「でも若おかみっていうことは、

その着物も自分で着ているのかな？」

「あ、はい。初めは苦労したんですけど、今はもう慣れました！」

「結構暑そうに見えるけど大変じゃない？」

「あ、それでもないんですよ、慣れるととても動きやすくて、

風も通るから涼しいんです！」

「なるほど、まだ若いのに、中身はもう立派な若おかみだね。」

「せ、ぜんぜん、まだまだなんですけど、

ありがとうございます！」

「それじゃあ今度はその着物を脱いで撮ってみようか。」  
「えっ? き、着物、ですか?」  
あの、でもこれは若おかみの制服でして…、  
お客様の目の前で脱ぐわけには…。」  
「ああそうなんだ、ごめんね、無理を言っちゃって。」  
「い、いえ!こちらこそ、すみません!」  
他のことでしたら、  
何でもしますのでお申し付けください!」



「び、びっくりしたあ…!!」  
今までいろんなお客様が来られたけど、  
さすがに、着物を脱いでなんていうのは、  
初めてだったからびっくりしちゃった…!!  
それはやっぱりできないもんね…!!」

「僕はカメラマンなんてやってるけど、  
実はおじさんが人のお顔を間近で写真に撮ると、  
その人は何でもできるようになるおまじないがあるんだよ。」  
「え？なんでもですか？」  
「そうだよ、たとえば織子ちゃんを間近で撮れば、  
織子ちゃんも僕が求めるどんなに難しいサービスにも  
対応できるようになるだろうねえ。」  
「えっ？どんなに難しいサービスにも、ですか……？」  
「興味あるかい？今まで接客で苦労したこと多いんじゃない？  
よかったら一回やってみようか？」



「たしかに、春の屋で若おかみとして働き始めて  
もう何度も失敗したけど、  
もしそれが本当なら、たくさんのお客様に  
もってご満足していただけるようになるかも……。  
若おかみとして、知っておいたほうが良さそう……！」  
「はい！ぜひお願いします！」  
「じゃあ近寄ってごらん、カメラに顔を寄せて。」  
「は、はい、こうですか？」



「!!」



パ  
ン  
ジ  
ヤ  
ー  
!

「織子ちゃん、織子ちゃん。」

「……えっ?」

「あ、す、すみません!ぼうつとしちゃってました!」

「いいんだよ、それより気分はどうかかな?」

「えっと……、そ、そうですね、」

まぶしくて、びっくりしましたけど、大丈夫です!

目が覚めて、今ならいろんなサービスが

出来るような気がします!」

(本当、なんだか気分が変わったような気がするわ!)



「それはよかった、」

僕も織子ちゃんにうそつきだって思われたくないからね、

そういつてくれてホツとしたよ。」

「いいえ、効き目はばっちりですよ、本当に!」

どんなことでも、がんばっちゃいます!

ご希望のことがあれば、なんなりとお申し付けください!」

「よし、じゃあ織子ちゃんは  
今着ている物を全部脱いじやおうか。」  
「えっ? あ、あの、ですから、この着物は……。」  
『着物』じゃなくて、『着ている物全部』だよ。  
約束したよね織子ちゃん、撮影に協力してくれるんだよね?  
若おかみなんだから、春の屋のために頑張るんだよね?」  
「えっ……?」  
「な、なんだろ、なにか、頭がこんがらがってきちゃった……?」



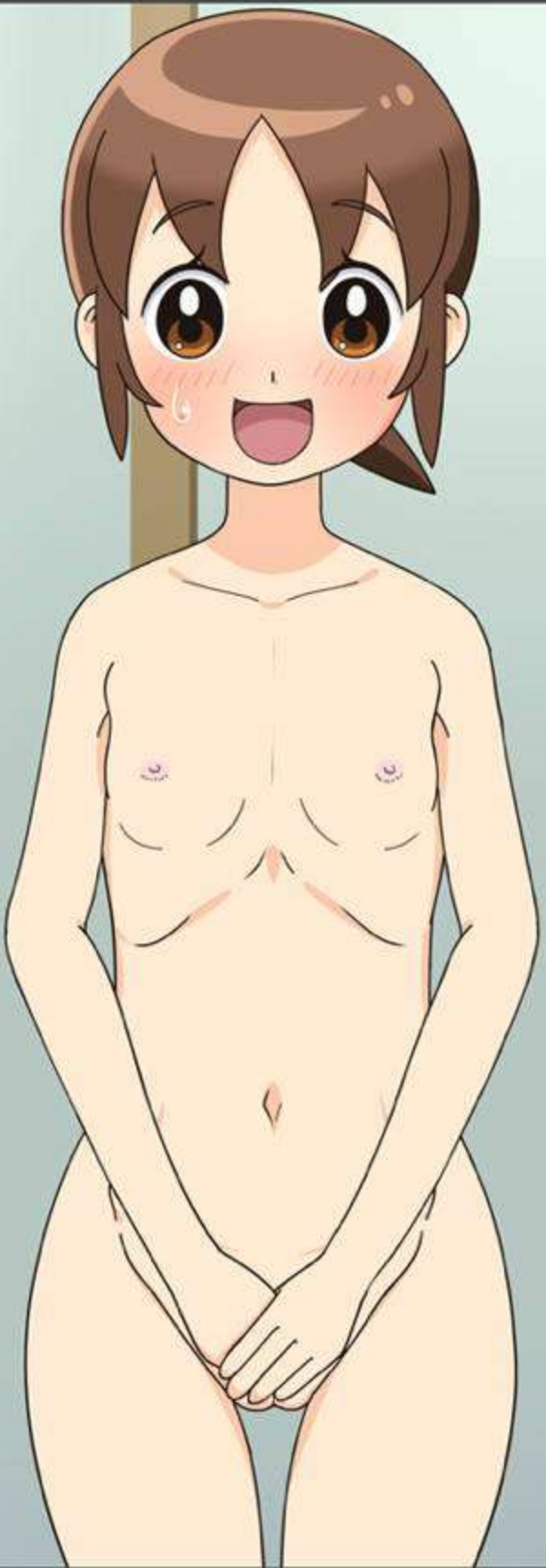
「ほら、何のために写真を撮ったのか考えてごらん?」  
「あ、あえ、えっと、それは……?」  
「写真を撮った理由は……そうだ、若おかみとして、  
お客様のどんなご要望にも応えられるようになりたいから、  
せっかく写真を撮るおまじないをしてもらった……!」  
「なんであたし、もう忘れちゃってるんだろう……!」  
「あ、そ、そうでした、そうですね……! す、すみませんでした!  
すぐにご用意させていただきます!」

「お、おまたせいたしました……!!」  
「あ、あの、これでよろしかったでしょうか……?」  
「うん良いよ、織子ちゃんの健康な身体が見れてみんなとっても喜ぶから!」  
「そ、そうですか?それなら、よかったです!」



「それじゃあさっきの要領で、  
今度は織子ちゃん自身の紹介をして貰おうか。  
学校の教室で初めて自己紹介した時みたいに見えるかな?」  
「は、はい!分かりました!」  
「それじゃあカメラを見て、……スタート!」

「いいいらっしやいませ、ようこそ、春の屋へ！  
あたしは関織子、~~20~~年生の~~20~~二歳です！  
友達やおばあちゃんからは『おっこ』って呼ばれています、  
よろしければみなさんもそう呼んでください！」

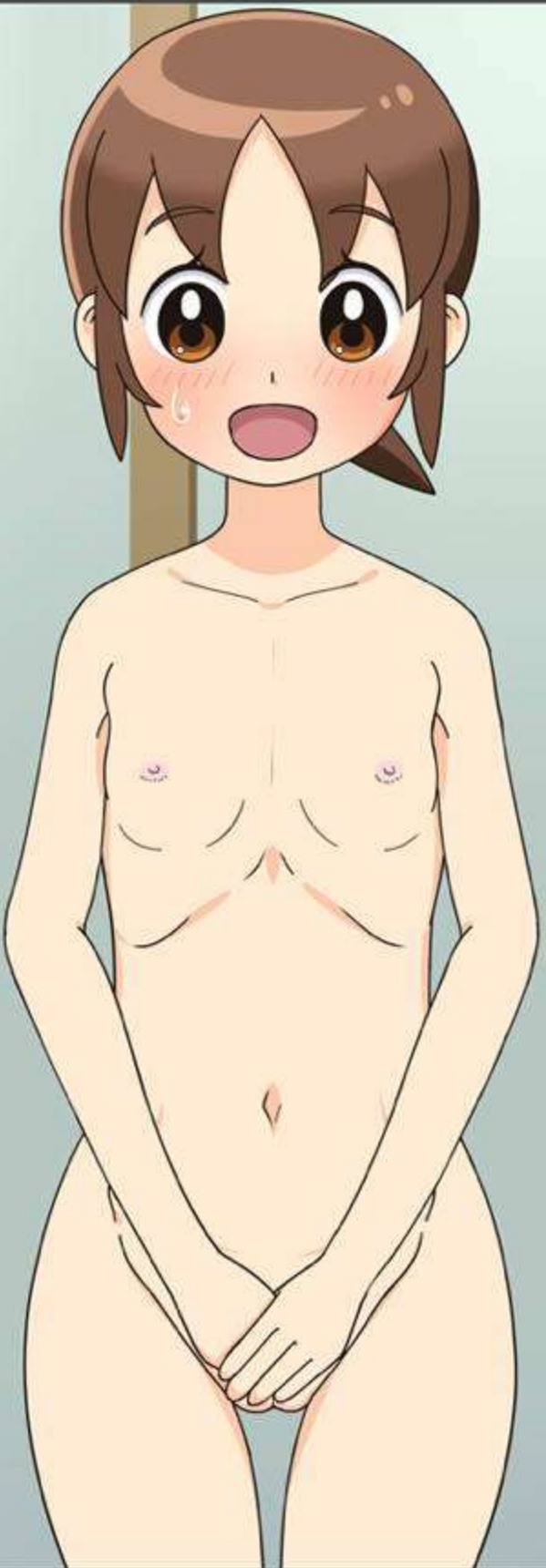


「おばあちゃん、春の屋旅館で若おかみをしていて、  
お泊りのお客様のおもてなしも、  
あたしがさせていただいています！  
みなさまのご来館を、心よりお待ちしております！」

（はい、カン。読んで！）

「え、え」と……！！

今回、しろうともものの、え、えーぶい？ビデオに、初めて出させていただくことになりました！」



「えーぶいデビュー作品はネット販売だけの短いものですが、人気が出れば続編も出していただけますので、みなさん、春の屋の若おかみを応援よろしくおねがいしますね！」

「……はいオッケー！良かったよ織子ちゃん、いきなりのカンペも一回でちゃんと読めたねえ。」  
「よ、読み方がよく分からないんであせっちゃいました……！」  
「だ、だいじょうぶでしたか？」  
「もう全然！バッチリだったよ！」



「織子ちゃんは周りから『おっこ』って呼ばれてるんだねえ、じゃあ僕もそう呼んで良いのかな？」  
「はい、もちろんです！あたしもそのほうがうれしいです！」  
「それじゃあおっこちゃん、今日一日撮影がんばろうね。」  
「はい！よろしくお願いいたします！」



「それじゃあ

床の具合を見たいから、

お布団敷いて

寝てみようか。」

「おふとんですか？

分かりました！」

え」と、でもここで

あたしが寝るのは……。」

「うん、これは春の屋の

紹介ビデオだからね、

若おかみが寝ている所が

撮りたいから良いんだよ、

お「こちゃん。」

「あ、そうなんです、

すみません！」

「それでは失礼します！」

「はい、じゃあ足広げようね。」

「はい！」



ニハヤッ

「おっこちゃん、  
まだおけ毛は生えてないのかな？」

「えっ？あ、はい、はい、  
あたしはまだみたいです！」

「友達が生えてきてる  
みたいなんですけど……！」

「生理は？うなのかな？」

「あ、生理はこの前来ました！」

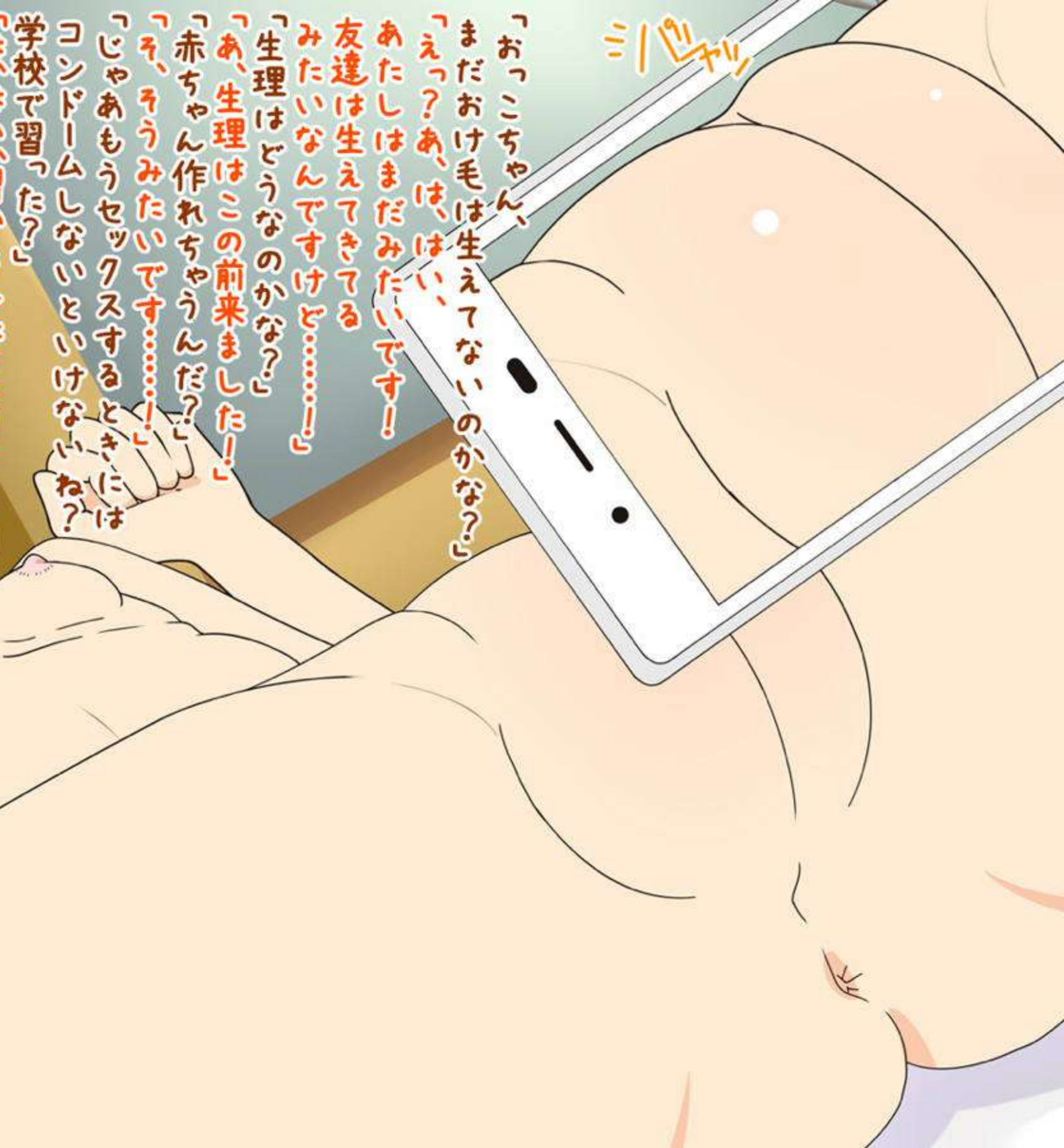
「赤ちゃん作れちゃうんだ？」

「そ、そうみたいです……！」

「じゃあもうセックスするときは  
コンドームしないといけないね？」

「学校で習った？」

「はい、習いました……！」



「じゃあおっこちゃんのおまんこを初潮したてのおまんこの味を確かめてみよう。」  
「ひゃあっ!?」

「だ、だめですよ、そんなところ、舐めたら汚いですっ!」  
「大丈夫だよ、おじさんがおっこちゃんのおまんこをたっぷり味わってあげるからね。ほら、結構おしっこの臭いとか汗の臭いとかすごいよ。これがおっこちゃんの臭いなんだね。」  
「ひああ……!」  
「は、はずかしいですっ……!」  
「ご、ごめんなさいいっ……!」



シロっ

シロっ



ちゅるる、  
れりゅれりゅっ……!!  
「はーっ……!!」  
はーっ……!!

ちゅっ……!!

あ

あ



「はあ……はああ……」  
「お疲れ様おっこちゃん、結構気持ちよさそうだったけどどうだった？」  
「あ、は、はひ、すごく、なにか、きて……！」  
「あ、あたまが、まっしろになっちゃいましたっ……！」  
「だよ、途中で何回かイッチやってたもんね、それがエッチする時の気持ち良さだから、覚えておいてね。」  
「ふえ、こ、これが、エッチなんですか……？」  
「わ、分かりました、よく、おぼえておきますっ……！」  
「それじゃあ本番だけど、処女膜もたっぷりふやかしたけど、初めてだからちょっと痛いのはごめんね。」  
「え？、な、なにか、……？」  
「いたいんですか……？」  
「は、はい、はい、じょうぶです、あたし、がんばりますっ……！」



「ほら、おじさんと手握って。」

「あ、は、はい……………」

「恋人同士みたいだね、

おっこちゃん。」

「こ、恋人……………!？」

「こ、恋人、あたし……………」

「おや、おっこちゃんには

好きな人がいたのかな？」

「それとも彼氏持ち？」

「え、あの、それは……………」

「それは悔しいなあ、

それじゃあおじさんが

めいいっぱいおっこちゃんの

新しい彼氏らしくなれるように

頑張ってあげるからね。」

「え……………」

「あ、は、はい、

がんばってください……………」





「はっ、はっ……!!」

「おっこちゃん、落ち着いたかい?」

「は、はい、少し……」

「慣れてきました……!!」

「それは良かった。」

「ほらおっこちゃん、おまんこから」

「処女膜を失った証の血が出てるよ、」

「おっこちゃんはおじさんに」

「初めてを捧げて、」

「処女じゃなくなっただよ。」

「僕にお礼を言わなきゃいけないね。」

「あっ、そ、そうなんですわ……!!」

「あ、あたしのはじめてを、」

「もらってくださって、」

「あ、ありがとうございます……!!」

「おっこちゃんの中に」

「おじさんのチンポが入ってるの」

「分かるかい?」

「は、はい、」

「すごく、おおきいのが、中に……、」

「はいってます……!!」

「それじゃあゆっくり動くからね、」

「痛かったら言ってね。」

「は、はい、分かりました……!!」





「あっ！あっ！あっ！あっ！あっ！」

「あああっ！」

「さすが若おかみだね、

ちっさなおまんこが

もう僕の大人チンポの

おもてなしを出来てるよ、

愛液の分泌も順調だし、

気持ち良いのかな？」

「わ、わかりませんっ！」

「けど、なにか、すごく、

おなかがあついですううっ！」

「なるほど、学生なのに、

おっこちゃんの身体は

すっかり大人ってわけだね。」

「あ、ああっ！」だめええっ！」

「なにかきちゃうっ！」

「きちやいますうううっ！」

「良いよ、僕ももうイキそうだっ！」

一緒にイこう、おっこちゃんっ！」

おっこちゃんも言ってごらんっ！」

ほらイクよっ、イクよっ！」

「あああああっ！」

「いっ、イッちゃうっ！」

「イッちゃうううううっ！」

ズッ！

ズチュッ！



「あああああああっ!!」

「くおおおっ、締まるっ!!」

●学生子宮に中出し!!!  
いっぱい注いであげるからね!

全部飲み込むんだよおっこちゃんっ!!」

「ああ!!」

「あああああ!!」

「あついいいい!!」

「おなかやけちゃうっ!!」

「へんになっちゃうっ!!」

ドグッ!!!

「はーっ、はーっ……!!」  
「ふうっ、気持ちよすぎて  
思わず力が入っちゃったよ、  
ごめんねおっこちゃん。  
大丈夫かい?」  
「あ、は、はい、」  
「あたしこそ、取り乱して  
しまっでごめんなさい、  
もう落ち着きました……!!」  
「それは良かった。  
でもイケないなあ、  
せっかく学校の授業で  
セックスの時には  
コンドームしなくちゃ  
いけないって教わったのに  
もうそれを破っちゃうなんて、  
先生に言っちゃおうかな?」  
「あ、そ、それは……!!」  
「二人だけの秘密だね。」  
「は、はい……!!」



「ほらおっこちゃん、  
おっこちゃんのおまんこから  
僕の精液とおっこちゃんの  
初めての血が混じった物が  
出てきてるよ。」

「あっ、やあ………  
みちゃだめです………  
はずかしいです………!」  
「ごちそう様おっこちゃん、  
おっこちゃんのおまんこ、  
とってもおいしかったよ。」  
「いいえ、

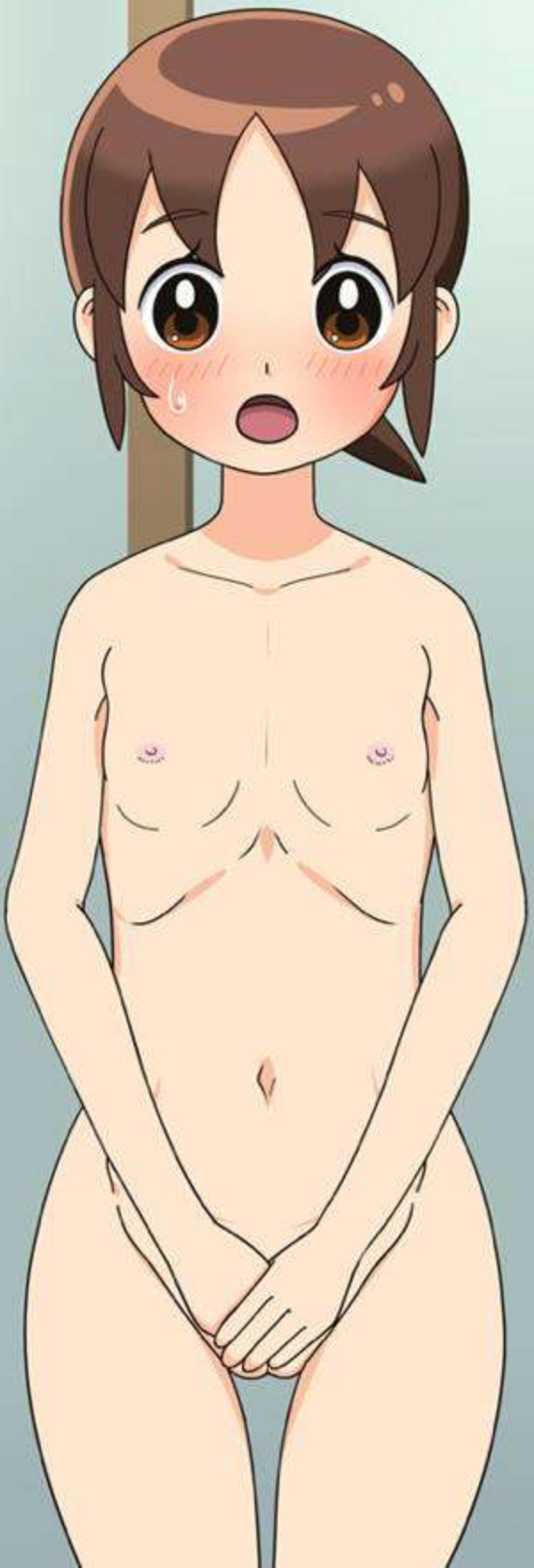
どういたしまして………!  
よろこんでいただけで、  
なによりです………!」

あ、あたしこそ  
お客様のおチンポ、すっごく  
気持ちよかったです………!  
初めての相手をして  
いただいて、ありがとう  
ございました………!」

トロ……

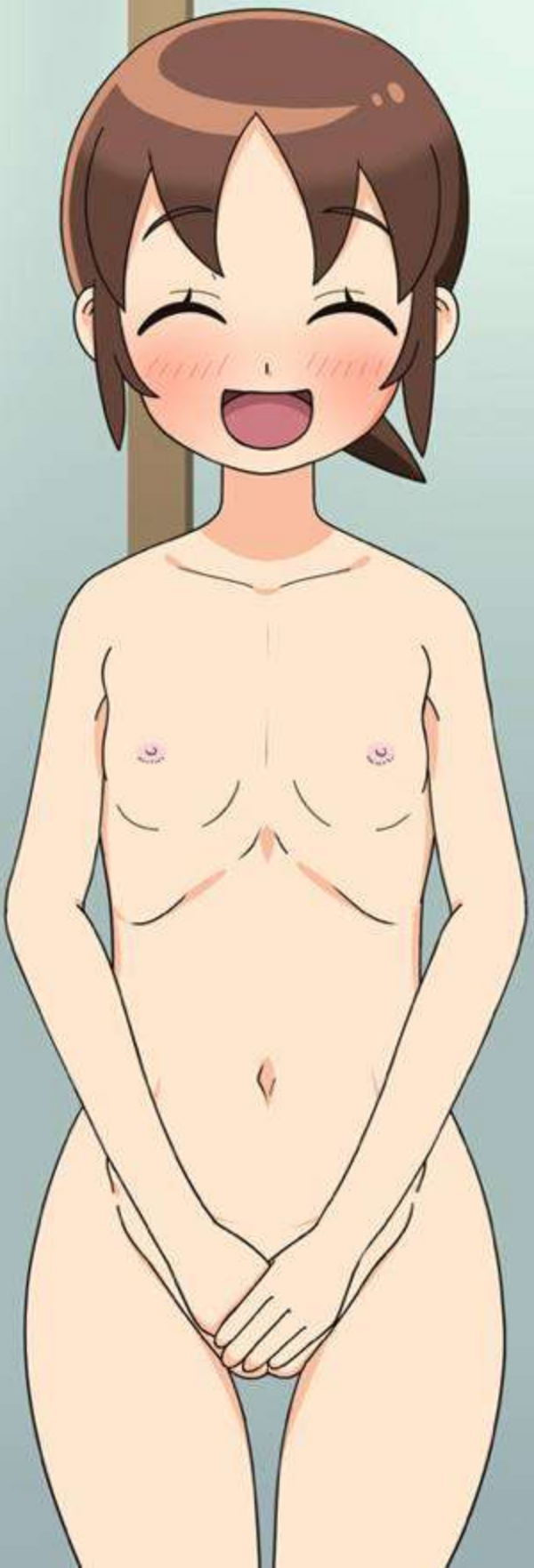


「んっ……あ、あれっ……う？  
もう、暗くなっちゃって……お、お時間が……!!  
あ、あの、お食事とか、お風呂とか……!!」  
「ああ、今日は撮影と取材で来てるから、  
事前に時間はいつもで良くしてもらってるんだよ。」  
「あ、そ、そうだったんですか？すみません……!!」  
「あれ、おはあちゃん何も言っただけでなかつたなあ……う？  
聞いておかないと……。」



「いいんだよ、僕が好きにさせてもらってるんだからね。  
それじゃあお風呂と食事してから、撮影を再開しようか。」  
「えっ？もう夜ですけど……あたしももう……。」

「ああ、おかみさんをお願いして、  
夜も部屋の中で撮影させて貰えるようにしたんだよ、  
それに撮影はこの部屋に若おかみ、  
おっこちゃんと僕の二人っきりで  
一晚中させて貰えるように頼んでおいたからね。  
言っただけじゃなかったね、ごめんごめん。」  
「あ、そうだったんですね!？」  
誰も来なかったなあ、って思ってた……失礼しました!」



「良いんだよ、だからおっこちゃんは今夜一晚中、  
僕のおもてなしにだけ精一杯頑張ってたね。」  
「はい、分かりましたっ!」  
「ご期待にそえるよう、がんばります!」













お風呂

「翌日の朝、目が覚めると

あたしはお客様の部屋にいました。

なんと、あたしは撮影中に眠ってしまったらしく、

お客様が自分のお布団に

あたしを寝かせてくれていたのです！

お客様は一人で撮影を続けた後、

あたしのためにいすの上で眠っていたみたいで……。

必死になって謝ったら、

「じゃあ今日のお手伝いもがんばってね」って

言ってくれました。

その後は旅館の各お部屋を簡単に撮影して、  
それでおしまいになりました。

何とか無事にすべての撮影を終えて、お客様は

「おかげでいい撮影が出来たよ」と

ほめてくださいました。

そして

「次の撮影があったらその時もよろしくね」と言ってお帰りになられたのでした。」

「その後しばらくして届いた  
本とDVDには、  
その撮影で撮った  
春の屋が載っていました。」

とてもきれいに撮られた写真に、  
おはあちゃんのインタビュー、  
しかもあたしのことまで、  
「素敵なおかみさん」って……。

あたしはそれを見たら  
ふいにお客様のお顔を思い出して、  
なぜかどきどき、  
してしまっていたのでした。」



「みなさんこんにちは！  
花の湯温泉・春の屋旅館の若おかみ・おっこです！  
今日はこの間、春の屋のPRビデオの  
撮影に来られた方が、再びお見えになります！」



「前回がとて人気だったようで、  
第二弾を撮ることになったそうです！  
撮影も楽しみですけど、でもあたしは  
またあの人に会えるのが、  
なんだかちょっと嬉しくて……」

「やあおっこちゃん、久しぶりだね。」  
「あっ！お、お久しぶりです、  
お待ちしていました！」  
「今回は前回よりしっかりとしたビデオに  
なりそうだから大変だと思うけど、頑張ろうね。」



「はい、お任せください！  
今回も春の屋の若おかみとして、  
最後までがんばります！」  
東京の友達も、この前のPRビデオ見てくれて……。」



「おや、それってもしかして、この前言ったおっこちゃんの彼氏君かな?」  
「え?!?!?いいいやその、ウリケン君は、あの……!!」  
「なるほど、遠距離恋愛のウリケン君は、おっこちゃんとかくまなく連絡しあってる訳だねえ、羨ましいなあ。」  
「べ、別にあたしたちは……でもですけど……!!」



「はいはい、でもその歳で遠距離恋愛かあ、少し妬けちゃうなあ、じゃあおっこちゃんに少しでも振り向いてもらえるように僕も頑張ろうかな?」  
「そ、そうですね、お客様も素敵なんですから……が、がんばってください!」

「そうだ、じゃあ撮影したものを彼に送ってあげようか、もちろん制作の素材だから、そのままは送れないけどね。」  
「あ、じゃじゃあ、お願いします！」  
「あたしも彼もケータイ持ってらんで、それで撮ればすぐに見せられますから！」



「へえそうなのかい、よし分かった！  
そうと決まれば早速挨拶から撮影を始めるよ、おっこちゃん。」  
「はい！よろしくおねがいします！」  
「それじゃあよい……スタート！」

「いらっしやいませ、  
本日はようこそ、春の屋へ！  
本日の案内をさせていただきます、  
若おかみの関織子です！」



「当館自慢の料理と露天風呂を楽しんで、  
こころゆくまでごゆっくり、  
おくつろぎください！」

「……はい、オツケー！良いよおっこちゃん、この前よりだいぶ柔らかくなってるよ。」  
「え、えへへ、そうですね？ありがとうございます！撮られるのにも、結構慣れてきたみたいですよ！」



「なるほど。それじゃあ次はメインの方撮るよ、準備は良いかい？」  
「えっ、メイン、ですか？」  
「はい、えっと、何をすれば良いんでしょうか？」

「ヤ、ッキと同じ挨拶で、お客に対して  
お風呂か食事か、床に入るかを聞いて貰おうか。」  
「えっ、来られたばかりのお客様にいきなり、  
お布団をですか？  
お風呂はご自由にお入りいただけますし、  
お食事もご希望の時間をお聞きしますけど、  
お布団は敷かないと……。」



「大丈夫だよ、お風呂も食事もお布団も、  
全部おっこちゃんに相手してもらおうことだから。」  
「えっ？  
あ、はい、ご用意はすべてさせていただきますけど、  
お相手というの……？  
他のお客様の対応もしないといけませんし……。」

「おっこちゃん、この前のおまじない、覚えてる？」  
「あ、はい！もちろん、覚えてます！」  
あの時はなんだかとても気持ちが悪くなって、  
撮影のお手伝いも、すべてのことが上手にやれたんです！  
お礼を言おうと思ってたのに、言いそびれてしまった。」  
「おっこちゃんは今でも素敵な若おかみさんだけど、  
どうもまだ僕へのサービスに  
徹しきれていないみたいなんだよね。」  
「あ、も、申し訳ございません、まだまだ勉強不足です……！」



「うん、だから今日もおまじないしてあげようかと思ってね、  
今日もすればおまじないがすっかりと身に付いて、  
だいぶ完璧になると思うんだ。」  
「そ、そうなんですか？」  
「どうしょっか？おっこちゃんが望めばだけど。」  
（うーん、どうしようかなあ。自分でもがんばりたいけど、  
この前の感じが身に付くなら自信にもなりそうだし……、  
それに、この人のことなら、信用できるし……！）  
「それでは、お言葉に甘えて、よろしいでしょうか？」  
「どうぞどうぞ、ほら、こっちにおいで。」  
「はい！ありがとうございます！」



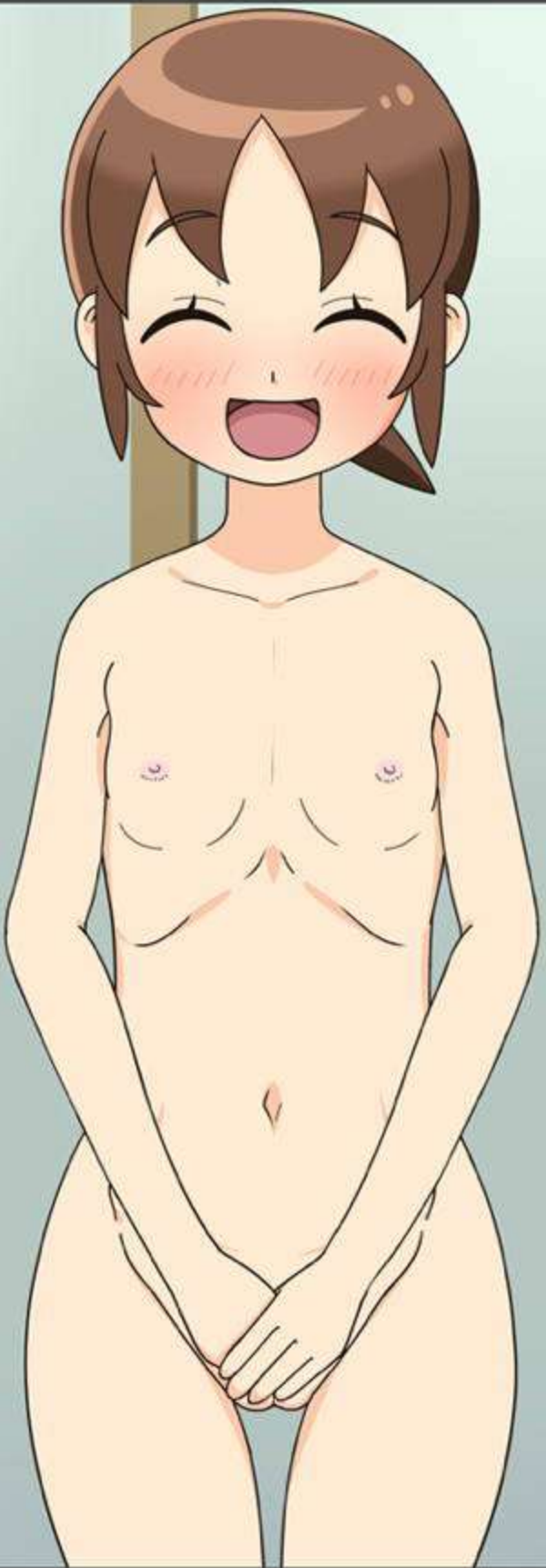
「ほら、おっこちゃん?」  
「……あつ、す、すみません! え、えつと……?」  
「撮影のお手伝いをしてくれるんだよね?」  
「だけど床の相手が出来ないとか何とか……。」  
「そ、そうでした! あたし、またお客様に同じ失敗を……!」  
「そうですよね、全部あたしが  
お相手させていただけばいいんですもんね!」  
「そうそう、じゃあ撮ろうか、でもその前に……。」  
「あ、き、着物も、全部脱ぎますね!」  
「良いね、ちゃんと学んでいってるね。」



「ごめんなさい、お待たせいたしました!」  
「あの、この前お客様としたことと合わせれば、  
いいんですよ?」  
「そうそう、それで良いんだよ。  
じゃあさっきの挨拶と同じ感じで、  
自分で考えて言ってみて、いくよ!」  
「は、はい!」



「いらっしやいませ、  
本日はようこそ、春の屋へ！  
本日の案内をさせていただきます、  
若おかみの関織子です！」

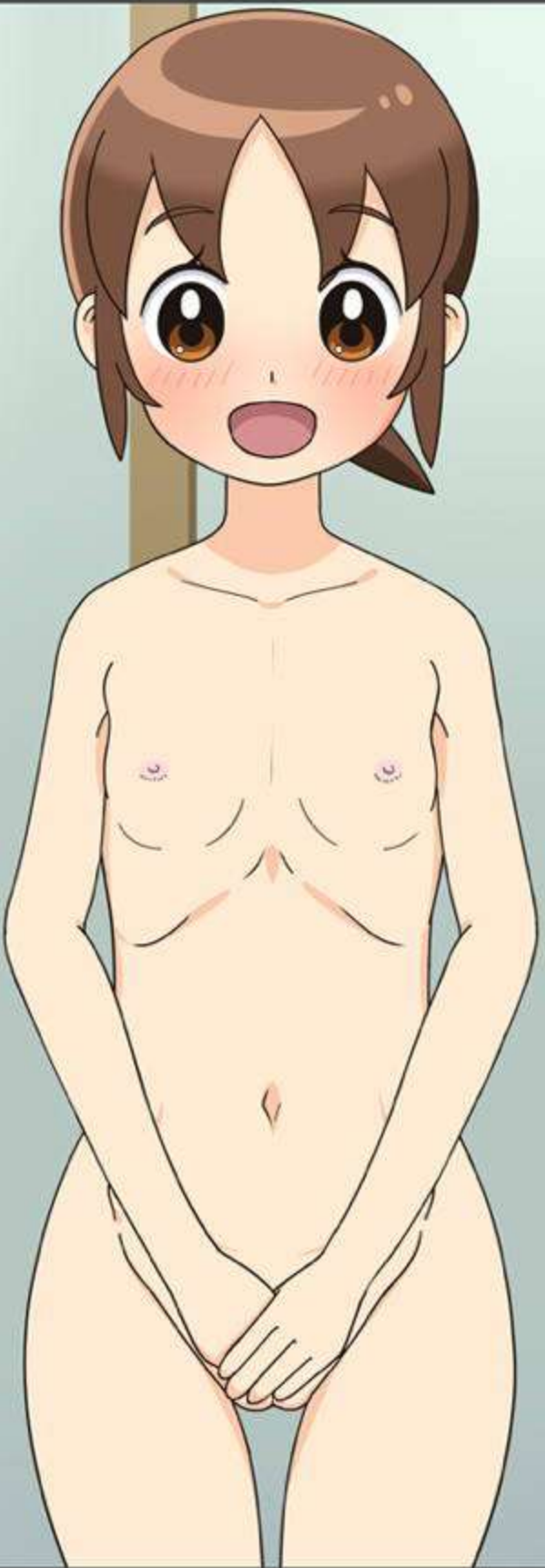


「お風呂になさいますか？  
お先にお食事になさいますか？  
それともお布団を敷いて、  
お相手をさせていただけますか？  
ま、まだまだ未熟者ですが、  
お客様にリフレッシュしていただけますよう、  
心より御奉仕させていただきます！」

(はい、カンペー！)

「あ、え」と……！！

「ぜ、前回のえーぶいビデオが好評だったのので、第二弾を撮っていただけのことになりました！これも動画を買って、あたしなんかを応援してくださる皆さんのおかげです、本当にありがとうございます！」



「今回は前回よりも長くて

密度も高めのビデオということ、

みなさんのご期待にますます応えられますよう、全身を使って撮影がんばりますので、

どうぞお楽しみくださいませ！♡

これからも応援よろしくおねがいいたします！」

「……はいオッケー！完璧じゃない、おっこちゃん。」  
「えへへ、ありがとうございます！  
ちょっと、自信がついてきたみたいです！  
お、お客様ののおかげだと思います……♡」  
「ふふ、それは良かったよ、  
おっこちゃんがかんばってくれると  
僕もうれしいからね。」



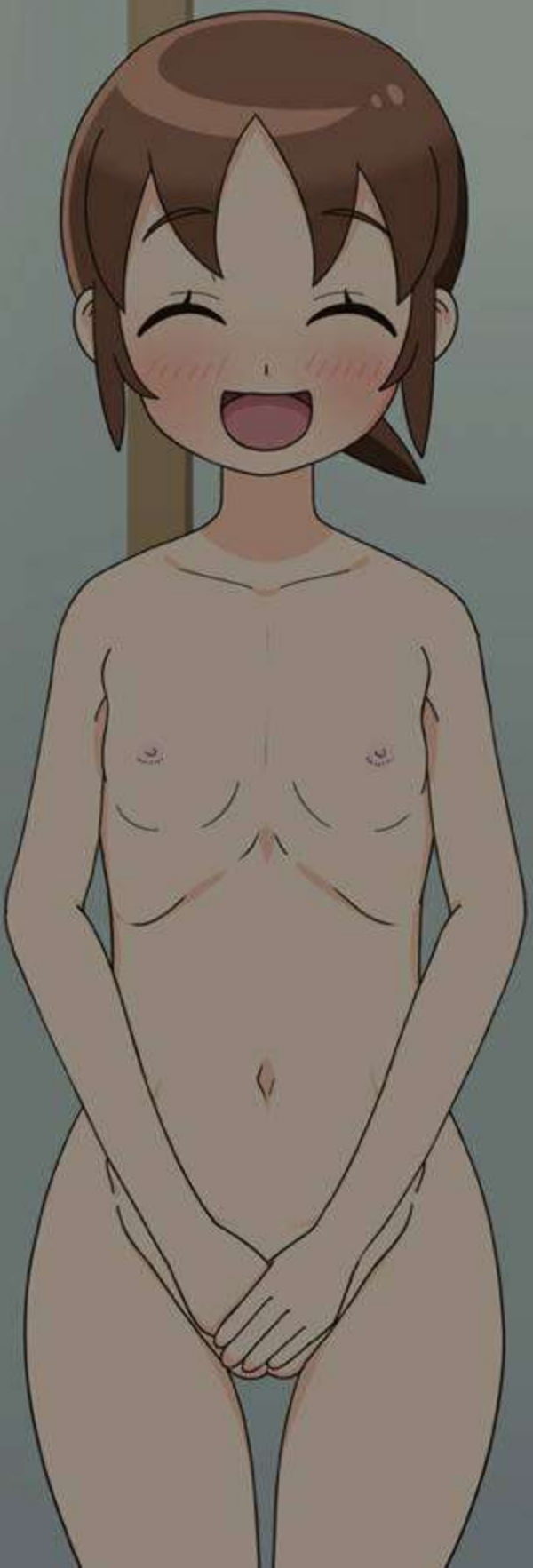
「あと、僕のこともう『お客様』じゃなくて  
『おじさん』で良いよ、お固いし、僕たちの仲なんだからね。」  
「よ、よろしいですか……う？分かりました！」  
「それでは、そう呼ばせていただきますね！」  
「それじゃあ今日はお風呂から撮っていいこうか、  
今の時間は撮影用で僕たち以外には誰もいないからね。」  
「は、はい、それでは、ご案内させていただきます！」

「……あっ。」  
「ん、どうかしたかい？」  
「あ、あの……で、でもですね、  
実はうちは混浴がないんですけど……  
もしかして……。」  
「大丈夫、ちゃんとおかみさんに許可して貰ってるよ。」



「やっぱり！そうだと思います、さすがです！」  
「ははは、ありがとう、  
それじゃあそのままここにしていると冷えちゃうから、  
早くお風呂に入ろうか。」  
「色々教えてあげるから若おかみのサービス、期待してるよ。」  
「はいっ！あたし色々、よろしくお願いいたします！」

こうして春の屋で初めての『混浴』となった  
露天風呂に移動したあたし達は  
早速撮影を始めました。



そしてそれと同時に、  
あたしはおじさんに若おかみとしてのサービスを  
お勉強させていただくことになりました！

「ひあー!? おっ、おっきい!」  
「ペニスが大きくなることはなんて言うんだい?」  
「これも学校で習ったよね、言ってるんか?」  
「はいはい! お、おじさんのペニスが大  
ぼ、ぼっきしてます!」  
「よく言えました。」  
目の前で見るのは初めてだったね、  
どうだい、大人のフル勃起チンポは?  
「す、すごい、です!」  
前に見た男の子とか、父さんのと、  
全然、色も形も大きさも  
ちがいます!」

ポロッ

ポロッ

「おっこちゃん、男の性器について、は  
どの程度のことを知ってるのかな?  
ちよ」と僕に教えて貰えるかな?  
「えっ? あ、はい!」

「あ、あんまり詳しくないですけど、たぶん女の人とかで興奮すると、あかちゃんをつくるために、男の人のペニスには『ぼっき』して、おっきくなるん、でしたよね……?」  
「で、おまんこに入れたり、手で……ますたーべーしょん、をすると、その、気持ち良くなって、射精して、精液が出て、女の人の中で受精すると、卵子と精子がくっついてあかちゃんが……。」



「うん、良く知ってるね、じゃあおっこちゃんのせいで僕らのペニスが大きくなっちゃうってのは、どういふことが分かるよな?」  
「は、はい、その、あ、あたしに……『ムリウさんして……!』」  
「あ、あたしに、あかちゃんを……!」  
「ふふふ、そうだね、」  
「まあおっこちゃんはこの前僕と実際にやってみせたから、他の子よりも分かりやすいかな?」  
「あ、あはは、そ、そうかもしれないです……!」

「じゃあ今日は撮影しながら、  
実際に精液をお勉強してみようか。  
精液の味とか臭いなんて、  
学校では教えてもらってないよね？」  
「は、はい！分かりません！  
教えてください！」

「それじゃあお口でチンポを気持ち良くして  
射精させる練習をしてみよう。  
男を気持ち良くさせる方法は  
おまんこと手だけじゃないって分かるうね。  
まずは軽く鼻頭の先っぽを啜ってごらん。」  
「は、はい、分かりました！お、お、まかせくださいっ！」



「あ、あむっ、あむっ。」

「こ、こころれすか……う？」

「良いよ、おっこちゃんのほってり唇が

とっても柔らかくて気持ち良いよ。」

それじゃあそのままべろで舐めてみなさい、

鼻頭の裏と付け根を重点的にね。」

「は、はい……！」

「ちゅぶちゅぶ、れりょれりょれりょ……！」

「じゃあ鼻頭に十分よだれがついたら、

大きく啜えて飲み込もうか。」

「は、はい……！」

ぽくっ



「んぶううううう……!!」  
「良いよ、そのまま前後して、  
ペニスにむしゃぶりつきなさい。」  
「んっ、んむっ、んぐっ……!!」  
「ほ、ほんとうに、すごくおっきいっ……!!」  
信じられないよ、男の人のおチンポが、  
こんなになるなんて……!!  
でもがんばって、気持ちよくなって  
いただかないと……!!」

じゅぽっレ

じゅぽっレ

「くうっ、今日の「発目」がもう出そうだよー!  
おっこちゃん、このままお回の中で出すから、  
しっかり飲み込むんだよ!!」  
「んぐっ!!んっ!!んっ!!んうっ!!  
んむううう……!!」





ちゅわわ

「ふはっ……、はあっ、はあっ……!!」  
「ど、どうでしたか……!!?」

「合格だよおっこちゃん、  
初めてとは思えない動きだったよ。  
射精の瞬間に奥まで啜えて、  
精液を残さず飲んじゃったんだからね。  
しかも尿道の中に残った精液も吸い出して、  
最後にかんぱつてくれたおチンポさんにも、  
お礼のキスマデしてくれるなんて、  
若おかみのおもてなしとして  
100点満点だよ!」

「そ、そうですか……!!? あ、ありがとうございます……!!」

「あ、ああした方が喜んでもらえるかなって、思ったんです……!!」

「それにお風呂に精液がこぼれてしまっても、いけませんから……!!」

「なるほどね。初めての精液はどうだったかな?」

「け、結構しょっぱくて、すごくどろどろして……、  
でも、おじさんのだと思おうと、ときどきして、  
すごく……うれしいです……!!」

「若おかみのかんぱりがここのまでなんつ、すごーい成長だよおっこちゃん。」

「あ、あはは、おじさんのためになら、かんぱれちゃいますから……!!」

「だけど、やっぱりまだツメが甘いみたいだね?」  
「え?」

「ほらおっこちゃん、お口の周りに  
飲み残しの精液と陰毛が  
たくさん付いちちゃってるよ。」

「あ?!?!?!」  
「ふふふ、どうしたらいいのかな?」  
「ご、ごめんなさい!」  
「すぐに、全部なめとります!.....!」

ロる

くロる

「おっこちゃん、お口へろへろしながらの顔をしちゃうてるよ、  
もしかしてエッチな気分になっちゃったのかな?」

「え、エッチな気分、ですか.....?」

「僕はまだまだイケるけど、おっこちゃんはどうかなのかな?」

「あ、あたしは.....!」

「す、すこしだけ、エ、エッチになっちゃってる.....かも.....!」

「ふふふ、それじゃあおっこちゃんももっとエッチになれること  
してみようか。」

「あ.....!」は、はい、あ、あの.....!」

「よ、よろしく、おねがいします.....!」

「ほら、立ってこっちにお尻を突き出してごらん。」  
「は、はい！こ、こうですか？」  
「かわいいお尻だねおっこちゃん、  
つるつるでゆで卵みたいだよ。」

「それじゃあカメラに向かって  
おっこちゃんからおねだりしてみようか。  
お勉強したとおりに言えるかな？」  
「は、はい！え、えっと……！」



「お、お客様、こちらが春の屋自慢の、

露天風呂でございます▼

美肌の湯で温まった後には、

おじさんの変態おちんぽっ▼

どうぞ目の前の、

ちいさな肉穴にさし込んでくださいっ▼

春の屋の若おかみが、

きつつきつのおままんこで

お客様のロリコンおチンポを

しごきあげる特別サービス▼

そのいやらしい肉棒の付け根まで、

たっぷりご堪能くださいませっ▼





「あきやああああ!?!」  
「おこちゃん、すごい声だね、  
旅館の外にも聞こえちゃうよ。」  
「あつ、こつ、ごめんなさいい!?!」  
「でも、これすごくてえ!?!」  
「久し振りだからいきなりは  
刺激が強かったかな?」  
「は、はい!?!」  
「でも、ずつとこれ、  
ほしかったんです!?!」  
「う、うごいて!?!」  
「おちんぽも」と  
「はい、いくださいい!?!」

ずちゃん!!

「おやおや、  
おこちゃんには好きな男の子が  
いるんじゃないのかな?」  
「あつ、それは、それはあ!?!」  
「良いよおこちゃん、それじゃあ  
セックス始めちゃうからね。」  
「は、はい!?!」  
「はやく、はやくうう!?!」

「あっ! あっ! あっ! ああんっ!」  
「おお、お「こちゃんの若おかみまんこが  
チンポに絡んできてと」ても良いよ、  
この前のでだいたいぶ男のもてなし方を  
覚えたいだね。」  
「あっ、ありがとうございませうっ!」  
「それじゃあ一応聞くけど、  
このまま中に出しちゃっても良いかな?」  
「あ、あの「ここで出すと、  
お風呂が汚れてしまっ!」  
「じゃあお「こちゃんが  
こぼさなければ  
良いんじゃないかな?」  
「あっ、そ、そうでしたっ!」  
すみませんっ!」

すっ!」

すっ!」

「よし、問題解決だね。  
それじゃあ一緒にイこうか!  
準備は良いかい?」  
「は、はいっ!」  
きてくださいっ!」  
あ、あたしももう、  
イ、イキますうううっ!」

「あああああああっ!!」  
「ほらおっこちゃん、分かるかい?  
今おっこちゃんのお腹の中で  
何が起きているのかな?」  
「は、はいいいいっ!!」  
「おっ、おちんぼから射精が……!!」  
「おじさんの精液が、  
あたしのおまんこの中に  
たくさん注がれていますっ……!!」  
「だ、だめええ、  
おじさんが気持ち良すぎて、  
何も考えられなく  
なっちゃうっ……!!」

レ!レ!レ!  
レ!

レ!  
レ!

「良いんだよ、おっこちゃんは  
僕に心をゆだねて、いっぱい  
気持ち良くなっちゃおうね。」  
「はっ、はいいいいっ!!」  
「あっ、あっ、あああっ……!!」

「あつ、あふううっ……!!」  
「ごめんねおっこちゃん、  
おっこちゃんが気持ち良過ぎて  
精液がいっぱい出ちゃって、  
結局お風呂にも結構入っちゃった。」  
「いい、良いんです、  
ここは女風呂ですし、  
あとであたしが掃除して  
おきますから……!!」  
「そ、それに、どうせ  
あたしのお汁は、最初っから  
入っちゃってましたから……!!」

「そういつてもらえると助かるよ、  
それじゃあお風呂から上がる前に  
もう一回挨拶撮っておこうか。」  
「は、はい、わかりました……!!」

トコ……

「お、お客様、  
若おかみの混浴サービスは  
いかがでしたでしょうか……♪  
露天風呂なら簡単にお外で  
お客様とエッチできるなんて、  
思ってもいませんでした……♪  
露天風呂って  
こういう使い方もあるんですね、  
良い勉強になりました……♪」

「つるつるのおまんこを  
おつゆで濡らしながら、  
皆様のご来館、心より  
お待ちしております……♪」



「ヤ、ヤ、と、じゃあそろそろ  
お風呂をあがってお部屋で食事を  
いただくのでしょうか。」

三日前に電話で

お「こちゃんにお願いしておいた

料理はできたのかな？」

「えっ？」

三日前に電話で、ですか……？

「……あ！」

「思い出したかな？」

「は、はい！」

すみません、思い出しました！

大丈夫です、

ちゃんと準備できています！」

「おお、それは良かった、  
じゃあ戻ったら早速  
用意してもらえるかな。」  
「は、はい、分かりました、  
すぐにとりかかりますので、  
少々お待ちくださいませ！」

「おじさん、それではテーブルの上、失礼いたします……!!」  
「うん、準備は良いかい、おっこちゃん?」

「は、はい、大丈夫です!」  
「ずっと我慢してたんで、すぐにご用意できます!」  
「で、でもこういう方法のお菓子作りは初めてなので、  
出してみないとうまくいっているかどうか……!!」

「大丈夫だよ、僕がおっこちゃんに  
急をお願いしたんだからね。  
それになんでもまずは挑戦してみないとね。  
それじゃあお願いするよ。」  
「は、はい!それじゃあ、いきます!」



「んぐ……!!」  
「お、肛門がふっくり膨らんだよ。  
カンドる顔も可愛いよ、おっこちゃん。」  
「ふあっ!」  
「んぐ……!!」

ぷくっ

「今はタイミングが悪かったかな?  
あんまり無理はしないで良いよ。」  
「いいえ、あたしがちよ」と緊張してしまっ……!!  
「だ、だいじょうぶです、もう、キマますからっ……!!」  
「うっ、ぐうっ!」  
「で、ますっ、でますううっ!」







「はあっ、はあっ………!!  
出し終わったら器を移して……  
クリを触るの、  
露天風呂みたいなのに、ぐるうっ………!!」

「仕上げに、特製カaramelソースと……  
花の湯温泉みたいな、白濁愛液クリーム………!!」

トオッ……



「お、お待ちせいたしました！」

春の屋・若おかみ特製、

ほかほかのひり出し露天風呂プリンの、完成です！」

「ううん、これはおいしそうだよ、おっこちゃんー！」  
「ど、どうぞ、ご賞味くださいませー！」



「あむっ……うんっ、おいしいっ！」  
おっこちゃんの特製のカラメルソースがちよっとほろ苦くて、  
黒豆プリンと相性バッチリだよ！  
それにこの愛液クリームがまるやかな上に、  
露天風呂の白いお湯にイメージがぴったりで、  
これぞ花の湯温泉、て感じなプリンだね！  
頑張ったね、おっこちゃん！」  
「な、なにが、足りない所は……!?!」

「おっこちゃんの若くて健康な内臓によって調理された  
黒豆プリンは最高の味だよ！  
工夫を凝らしたオリジナルの部分も満点だ！」  
「わあっ！本当ですかっ!?!」  
「上手く出来てるか、とっても心配だったんです！」  
「あ、ありがとうございますっ!」



「ふう、あんまり美味しいから

「一気に全部食べちゃったよ、ご馳走様。」

「いいえ、どういたしまして！」

「でもいきなり注文しちゃってごめんね、

作り方も電話越しで、初めてだったのに大変だったでしょ？

しかも、オリジナルでソースまで作って見せるなんて！」

「いえ、そんな！」

でもあたしもハッキリと覚えていなくて、すみませんでした。

三日前から急に黒豆プリン材料しか食べたくなくなっちゃ

しまっ、どうしてだか気になっちゃいたんですけど……、

おじさんに電話でご注文いたっていたんでしたね！」



「普通に作った黒豆プリンだけだと、もう一つ味と風味が

物足りなかったのだから、カラメルソースもつくって見たんですけど、

うまくいってよかったです！」

白濁愛液クリームもこの前おじさんとたくさんセックスした時に

いっぱい出たから、そこから思いついたんです！」

無事に出来て、本当によかったです！」

「僕も電話越しでおまじないをかけられるか不安だったんだけど、

純粋ならかかってくれるから、おっこちゃん、本当に良かったよ。」

「えへへ、そんな……あ、ありがとうございます……！」

「じゃあおっこちゃんが実際にどうやって作ったのが、

説明してもらって良いかな？」

「はい、分かりました！」

「おじさんにレシピを教えていただくことで完成した  
若おかみ特製、ほかほかのひり出し露天風呂プリンの作り方は、  
まずお客様にお出しする三日前から、  
このプリンの材料しか食べないことです  
卵に牛乳、黒豆など……よく噛んで、  
回の中でピューレ状にしてから飲み込みます。  
そうして三日間過ごすと、体内で溜まって、  
混ざり合った材料が身体の熱で固まり、  
黒豆プリンの完成です！」

「その教えていただいたレシピを参考に、更にオリジナルの  
二種類のソースを加えさせていただきました！  
なのでこのお菓子をご希望されるお客様は、  
数日前からの御予約をお願いいたしますね」  
「うーん、初めてなのにちゃんと調理できてる上に、同じ作り方で  
味の調整までしてみせるなんて、もはやプロ級の腕前だね。  
お「こちゃんの食事のバランスに負担をかけるのは嫌だけど、  
これからここに来る時は必ず頼まないといけないなあ。」



「あはは、でも、やっぱりこれは、  
誰にでもということでもないですよ……、  
お、おじさんにだけなら、いつでも……!」  
「おっ、それは僕はおっこちゃんのお  
得意様になれたってことで良いのかな!？」

HP...V

「は、はい!おじさんは、あたしの、た、大切な、お得意様です!」  
「おや?おっこちゃん、愛液クリームが垂れてきちゃってるねえ、  
なにかどきどきしちゃうてるのかな?」  
「それともこれは追加のクリームなのかな?」  
「えっ!?!あ、その、これは……!」

「じゃあちよっとはしたないけど直飲みも試してみようか。」  
「ひあっ!?!?」あっ、そっ、そんなあっ!?!  
「だだめです、クリームだけなんっ………そんなっ………!?!」  
「ふああああっ!?!」  
「んぐっ、んぐっ、うん、おいしい!」  
「おっこちゃんの身体で作られたものは、  
なんでも格別においしいよ!」

「あれっ? おっこちゃん、おまたの毛、うっすら生えてきてる?」  
「あ、は、はい、そうみたいです………!?! この前から、少し………!?!」  
「それは良かったね、おめでどう!」  
「いやあ、おっこちゃんのおまん毛のうぶげを  
眺めながら飲むクリームは最高だねえ。」  
「ふあっ、はああんっ!?!」  
「あっ、ありがとうございますっ………!?!」

しゅん

しゅん



「おやおや、飲んでも飲んでも溢れてくるようになってっちやったねえ、むしろ勢いが増しているよ。」

「蛇回が壊れちゃったのかな?」  
「あ、そ、そうかもしれません……!」  
「あなたに飲まれて、あたしのじゃぐちが……!」

トロオッ……

「ただこのまま流し続けるのももったいないね、じゃあちょっと座ってみようか、おっこちゃん。」  
「は、はい、分かりました……!」

「おっこちゃんはそのままで足を閉じて座っておいて。それじゃあ焼酎をいただきますかな。」  
「あ、はい、それではあたしが  
お酌させていただきます！」  
「いやいや、おっこちゃん動かないで、ほら、おまたに溜まってきたおっゆがこぼれちゃうでしょ？」  
「えっ？あっ！ほ、本当だ……！」

「それじゃあ  
おっこちゃんのおかめ酒を  
飲ませてもらうとしようか。」  
「えっ？わかめのお酒ですか？  
えっ……？」  
「教えてあげるから、  
そのまま動かないでね。」  
「え？あ、はい、分かりました！」



「ひやあっ!?!」  
「大丈夫かい?」  
「あ、はい、ちょっと冷たくて、  
びっくりしちゃいました……!」  
「ごめんね、こぼれないように、  
足はびったり閉じておいてね。」  
「は、はい!」

トプッ、トプッ、

「よし出来た、  
若おかみ特製のわかめ酒だ!!」  
「こ、これが、  
わかめ酒、なんですか?」  
「そうだよ、  
お酒に浮かぶ女性の陰毛が  
わかめに見えるから  
そう呼ぶんだけど、  
おっこちゃんのお毛けは  
生えてきたばかりだから、  
新わかめ酒だね。」

アッ……

「ごめんなさい、まだ  
ほとんど生えてなくて……!」  
「全然良いんだよ、おっこちゃんのお酒が大事なんだからね。  
それじゃあ飲ませてもらうよ。」  
「は、はい、どうぞ……!」  
「お口に合いますか……!」





「はあ、はあ……!!」  
「ふう、ようやく飲み干せたよ、満足満足。」  
「おや、おっこちゃん、どうかしたかい?」  
「す、すみません、  
なんだけか、すごく身体が熱くて、  
ぼう」としてしまっ……!!」  
「おまんこからお酒を吸収して  
酔っ払っちゃったみたいだね、  
倒れたら大変だし、  
じゃあお布団に横になろうか。」  
「は、はい、すみません、  
ありがとうございます……!!」



「ひあー!? つ、つめたい!」  
「ごめんね、でももう少し……、よし」と!  
これでお「こちゃん」の大切なところと直接つながったからね。  
お「こちゃん」の赤ちゃんのお部屋、子宮の入り口が  
誰からでも見えるようになったよ。」

「えっ! う、あ、だ、だめですよ、そんなの見たらっ……!」  
は、はずかしいよおっ……!」





「あつ、あふっ……、あふううっ……!!」  
「すっかり出来上がったねおっこちゃん、ゆでだこみたいだよ。  
一気に一本飲んじゃうなんて、おっこちゃんは酒豪なんだねえ。」



「あ、わ、わらひ、もおこれいじよおは……!!」  
「そうだね、じゃあおまんこでお酒以外のものを飲んでみよっか。」  
「ふえ……う？お、おさけいがいい、れすか……う？」





「あっ、あっ、あっ……!!」  
「やあ、すっかりお腹が妊婦さんみたいに膨らんじやったねえ。  
どうかな、お腹の中のお魚さんたちは？」  
「す、すごい、うごきますうう……!!」  
おなかのなか、ぐりゅぐりゅ……!!

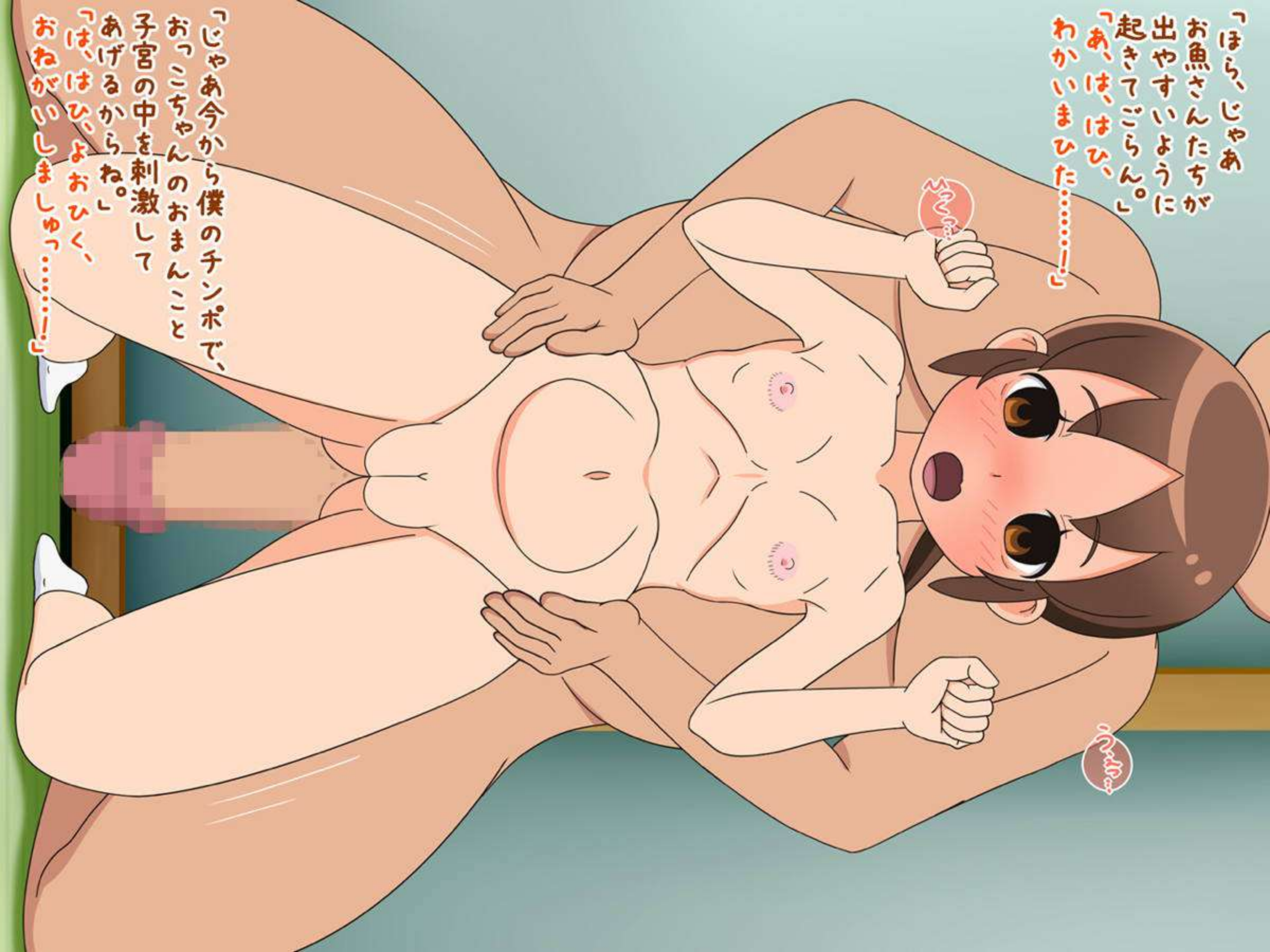
「みるんなおっこちゃんのお部屋が大好きなんだね、  
おっこちゃんの赤ちゃんになれて幸せなんだよ。」  
「そ、そうなんですか……? そ、そえはよかったです……!!」  
みんなあわへになっ、れくれれ、  
わらひ、とっれもうれひいれすうう……!!

ピョ……



「ほら、じゃあ  
お魚さんたちが  
出やすいように  
起きてごらん。」  
「あ、は、はひ、  
わかいまひた……！」

「じゃあ今から僕のチンポで、  
おっこちゃんのおまんここと  
子宮の中を刺激して  
あげるからね。」  
「は、はひ、よおひく、  
おねがいしましゅ……！」



「ああああんっ!?!」

「おや、もう」

おまんこの中は  
ぐちよぐちよだねえ、  
このぬるぬるは  
うなぎさんの  
ぬるぬるかな?  
それとも  
お魚さんたちに  
子宮まで犯されて  
気持ち良くなっちゃっ  
てるのかな?!

ずぶっ!」

「ち、ちがいますうっ……!」  
「お、おじさんののおちんぽ  
いれてほしくて……!」  
「から……!」  
「可愛いよおっこちゃん、  
それじゃあお望みどおりに  
いっぱい犯してあげるからね?」  
「は、はひっ!」  
「あたひでいっばいっ  
きもちよくなっ……!」



「あっあっあっあっあっあっ!」  
「どうかなおっこちゃん、」

僕のチンポは?」  
「すっ、すごいれすううう!」

うなぎさんより、  
ふといおちんぽおっ!」

わらひのなかれ、  
あばれまわっれ

りゅうううう!」  
し、しきゅうのいりぐち?

っっつかれれ!」  
き、きもちいいれす

うううう!」

「よおし、」

そろそろイキそうだ!  
それじゃあ

お魚さんたちを出す為  
チンポを子宮の中に入れて、

今度は僕の精子を中に出す  
からね、おっこちゃん!

「は、はひい!」  
どうぞおおお!」

あなたのせえし!」  
あたしにいっはい

くださいいっはい!」

ずちゅっ、ずちゅっ、ずちゅっ!」

「うあああああッ!!」  
「しっ、しきゅうがああッ!!」  
「おちんぽとせいえきで  
ふくらんでっ……!!」  
「もっ、もうこれいじよお  
はいりませんっ!!」

「大丈夫だよおっこちゃん、  
赤ちゃんが出来たらもっ  
大きくなるんだからね、  
苦しいと思うけど  
もう少しだけ頑張って!!」  
「はっ、はひいっ!!」  
「わ、わかいました、  
がんばりまっしゅっ!!」

ぷるるるる!!



「んっ、んおおっ………!」  
「ひっ、はひっ……!」  
「お、おなか、  
しゅっ、しゅっ………!」

しゅっ、しゅっ

「大分子宮を  
刺激出来たと思うけど、  
どうかかな、出そう?」  
「は、はひ、  
き、きてます………!」  
「ぐりゅぐりゅな………!」  
「もっ、もおおお………!」





「うあああああああっ!?!」

「おっ、でたでた!」

「おっこちゃん、

うなぎさんが

出てきたよ!」

「あっ! ああっ!」

「あはあああああっ!」

「あれ、おっこちゃん、

もしかして

うなぎさんで

イツちゃってる?」

「はっはあああっ!」

「ひっ、おっ、

おっぎいよおおっ!」

「お、おなかか、

しきゅうのいりぐち

があああああっ!」

「良いよおっこちゃん!

すごく可愛く

撮れてるよ!」

うなぎさんに犯されて

絶頂するおっこちゃんを

みんなに見て貰おうね!」

「あああああっ!」

「イグツッ! イグウウツッ!」

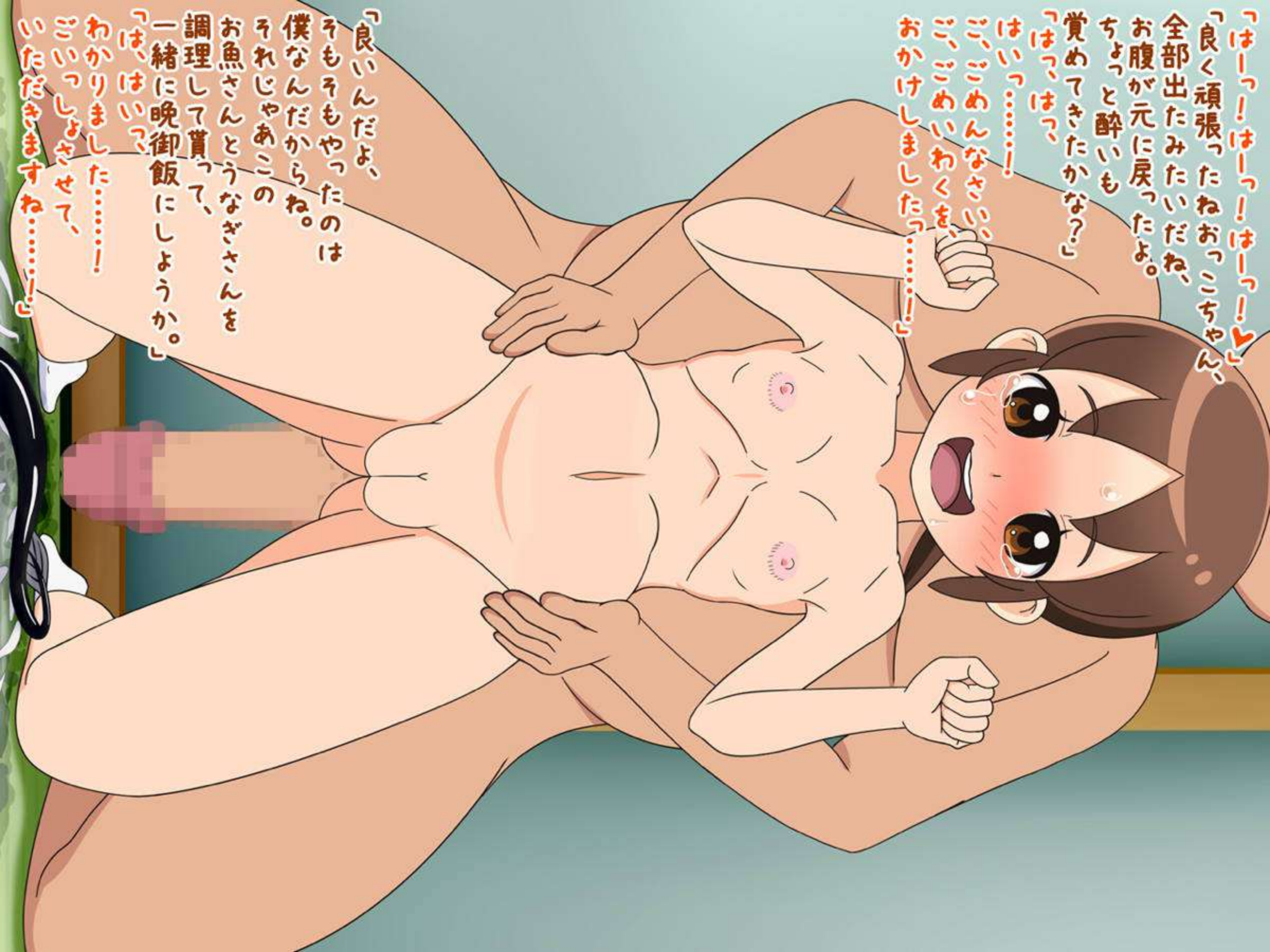
「またイツチャうぐう

うううううっ!」

アッ! アッ! アッ!

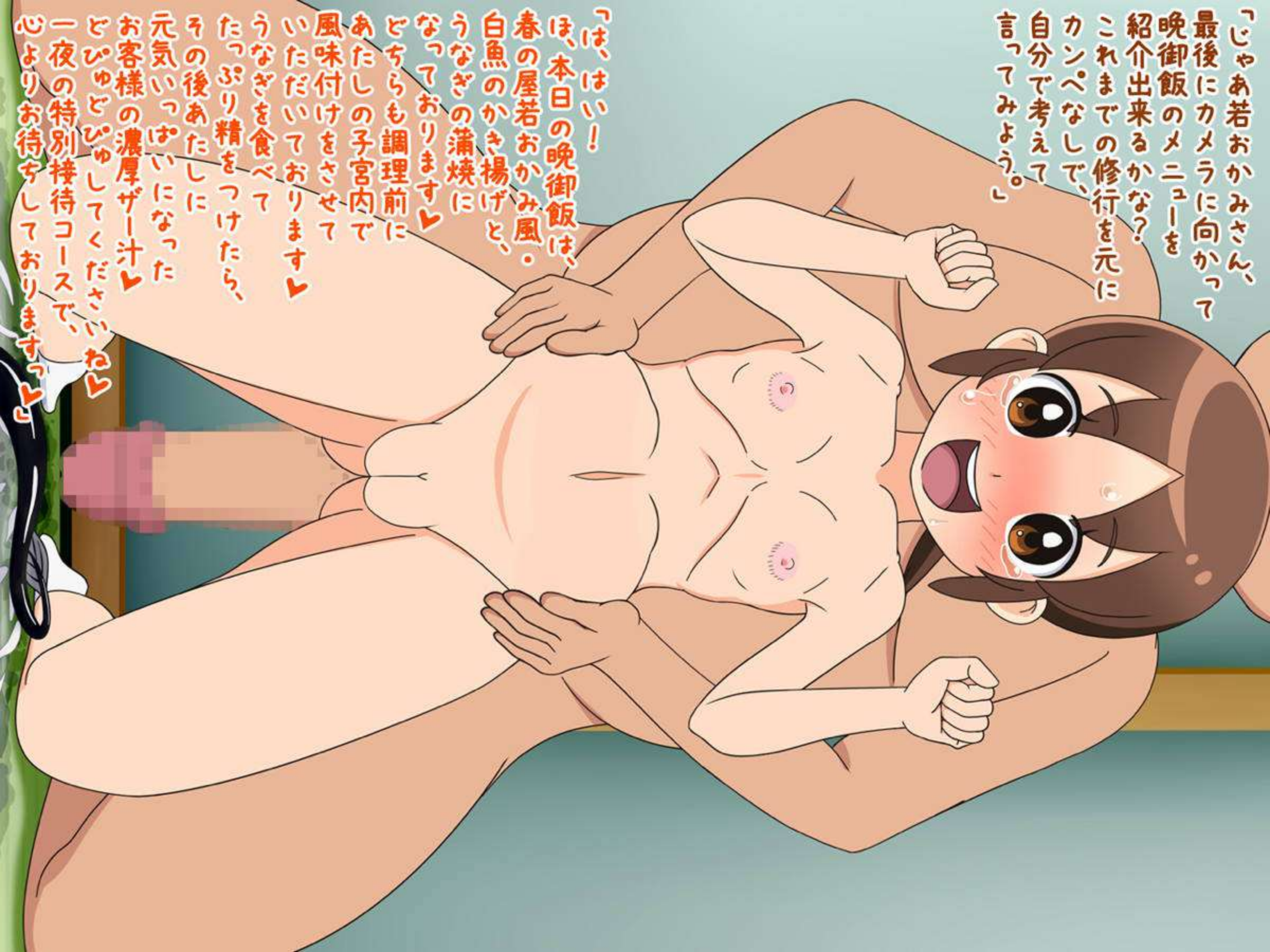
「はーっ!はーっ!はーっ!はーっ!はーっ!」  
「良く頑張ったねおっこちゃん、  
全部出たみたいだね、  
お腹が元に戻ったよ。  
ちよっ!と酔いも  
覚めてきたかな?」  
「はっ、はっ、  
はい!……!」  
「ご、ごめんなさい、  
ご、ごめいわくを、  
おかけしましたっ!……!」

「良いんだよ、  
そもそもやったのは  
僕なんだからね。  
それじゃあこの  
お魚さんとうなぎさんを  
調理して貰って、  
一緒に晩御飯にしようか。」  
「は、はい!」  
「わかりました……!」  
「ごいっしょさせて、  
いただきますね……!」



「じゃあ若おかみさん、最後にカメラに向かって晩御飯のメニューを紹介出来るかな？ これまでの修行を元にかんぺなしで、自分で考えて言ってみよう。」

「は、はい！  
ほ、本日の晩御飯は、春の屋若おかみ風・白魚のかき揚げと、うなぎの蒲焼になつております♡  
どちらも調理前にあたしの子宮内で風味付けをさせていただいております♡  
うなぎを食べてたっぷり精をつけたら、その後あたしに元気いっぱいになったお客様の濃厚ザー汁♡  
どいゅどいゅしてくださいね♡  
一夜の特別接待コースで、心よりお待ちしております♡」





「それから春の屋のPRビデオの撮影は続いたのですが、  
いつの間にかあたしは身も心も、  
すっかりおじさんの虜になってしまいました。」



「あんっ!」んっんっ、そこっ、気持ちいいです「……………」  
「ふふ、もうおっこちゃん性感帯の開発も大分進んだからね、  
どこだっ、気持ちいいでしょ?」  
「そ、そんなことないですう……………」  
気持ちいいところ、ちゃんといっばい  
ついてもらわないとイケませんからあ……………」

すけちゃん



がっちゃん

「良いよ、おっこちゃんのおかげなら  
何でも聞いてあげるからね。」  
「あんっ!」あ、ありがとうございます……………」

「……お、おじさん……、  
……だ、大好きです……!」  
「おお、この状態でその言葉、ってことは、  
もしかして本物の告白、って受け取っちゃっていいのかな!?!」  
「そ、それは、その……、は、はい……!」  
「おじさんといると、胸がときどきして、苦しくなってる……  
おじさんがいないと、さみしいんです……」  
「お、おまんこも……!」



「ふふふ、ようやく念願叶ったってところかな、  
僕もおっこちゃんのこと大好きだよ。  
これで僕たちは恋人同士って訳だね、嬉しいよ!」  
「あ……!そ、そうですね……はい……!」  
「あ、あたしも、とってもうれしいです……!」

「あれ、でもおっこちゃん、ウリケン君が彼氏なのに良いの?」  
「……………す、好きです、けど……………」

「お、おじさんがきてから、なんか、あたし……………」

「そういうえはおっこちゃんて、ウリケン君といつでもこっさりやり取りするためケータイ買ってもらっただよね?」

「やっぱりエッチな写真とか送っちゃった?」

「えっ? あ、あの……………この前初めて、一回だけ……………」

「おっこちゃんからおねだりしたのかな?」

「いいいえ、違います! その前にあたしが、ケータイの操作を

間違えて、お風呂あがりの変な写真を送っちゃって……………」

「それから彼が、なんとなく欲しがるから……………」

「ず」と断ってたんですけど……………」



「まあ男の子だからねえ、なんであげる気になったの?」

「え、え」と……………その、彼の、

「……………お、おちんぽって、どれくらいなのかなって……………」

「ははあ、自分を満足させてくれるかどうか知りたかったんだ?」

「そ、そうじゃなくて! おじさんと比べたらどうかかなって……………」

「それで写真を交換したんだね。で、どうだったの?」

「もう、ぜんぜんだめです！」

「こうんな！あたしの小指の先っぽみたいなので！」

「おじさんのと並べたら、わかんなくなっちゃいそうなのでした！」

「カラダは大きいから、期待したんですけど！」

「ありやりや、小学生とはいえ、

それはちよつと男としては可哀想かもねえ。

それで、おっこちゃんはおまんこを撮って送ったの？」



「いいいえ、あたしは、胸を少しだけ……！」

「でも一回交換したら、それからなんか感じが変わった……！」

「あたしはそんなことするために

「ケータイ買ってもらったんじゃないのに……！」


「それから撮影が始まって、あたしにはおじさんが

「毎日一緒にいてくれてるんで、ちよつと無視してます！」

「ははは、仕方ないよ、年頃の男の子なんだから。  
要求が控えめなだけでも、かなりまともなんじゃないかな？  
じゃあウリケン君はおっこちゃんのおっばいの写真一枚で、  
もう何回も何回もお猿さんみたいにヌキまくってるだろうね！  
今も一生懸命おちんちんこすってるんじゃないかな？」



「いいいやですよ、そんなの……！！  
あたしの知らないところで……！！  
本当におじさんと、ぜんっぜんちがうんですから！」



「でも雑誌でおっこちゃんを見ただけで、気に入ってわざわざ押しにかけてきたんでしょ？行動力のある男の子だと思うけどなあ、めったにいないよ、そんな子？」

「そうかも知れませんが……」

「でも、そのために色々嘘付いたり、今でもしよっちゅう言い合いになったり……」

「よく考えたらそれってやりすぎじゃないかなって……」


「ああ、歳が歳なら、下手したらストーカー扱いかな？」

「ストーカー……？や、やだあ、あたしそんなのイヤです……！」

ウリケン「マ……！」

「ごめんごめん、そこまで心配しなくて良いよ。まあ万が一、おっこちゃんに何かあったら、おっこちゃんも春の屋も、僕が守ってあげるから大丈夫だよ。」

「あ……！……！……！……！」



「あ、でもおっこちゃんがずつと無視してたんなら、僕がおっこちゃんのケータイから彼にずつと送ってた微妙な写真は、彼からしたら一方通行でかなり意味不明だったかな?」  
「あ、そうかもしれないですね……。」  
「まあ、気にしてないと思いますけど……。」

「ははは、結構酷いね、おっこちゃん。彼女として彼をよく知ってるからかな?」

「それとも、もうどうでもいい?」

「えー……?ど、どうでもいいって……、おじさんと、いっしょにいるから……。」

「どうでも良いんだ(笑)」

「あ、あはは、いえ、そんなことは……。」

♪ピリリリリリリリ♪

「おや、電話だね、誰からだい？」

「あ、これ、ウリケンからです。」

「どーせまた写真くれ、動画くれ、ですよ？」

「そんなにハッキリは言いませんけど。」

「僕は気持ち分かるんだけどねえ。」

「まあ今の撮影始めてからずっと無視してたんでしょ？」

「そろそろ出てあげたらどうだい？」



「んう、でも……おじさんとしてる最中ですし……。」

「おっこちゃん。」

「はうい、分かりました！それじゃあ、出ますね！」



ピッ!

「おつ、ようやく出たか! お前なんなんだよ、電話やメールは返さないくせに、毎日写真はたくさん送ってきて!」  
「ん、んう、ごめんね、ちよ」と忙しくて……。」

「お前、最近変な写真ばっか送ってくるのな! 脱いだある着物とか、変わった形のプリンとか、なんだよこれ、うなぎか? それに肌色の割れたやつ……肘か? なんだこれ? ボケボケでわかんねえ!」

「あ、それ、唯一のおっこちゃんのおまんこ(笑)」  
「ぶっ! (笑)」

「あ? なんか言ったか?」  
「なんでもないわよ!」

なに、写真送れって言うから送ったのに、まだ何か文句あるの?」  
「いいいや、別に送れとは言っていないけどさ、どうせならこの前みたいなの……。」

「なあに、何が言いたいなの? ハッキリ言いなさいよ!」  
「だ、だからさ、また、お前の、写真を……!」



「なんか必死だし、じゃあ今僕が撮って送ってあげようか？」  
「ええ、いいですよ、そんな甘やかさなくて……。」  
「あ？なんだ、だれかいるのか？」



「あたし一人よ！  
もう、仕方がないなあ……！！  
でも、もうこれで最後だからね！」  
「お、おお！ちゃんとしたの、くれよな！  
その後で旅館の話もしたいし！」  
「じゃあ一旦切るわよ！」  
ピッ！

「はあ、こんななんですよ！本当、イヤになっちゃう！  
なんで旅館の話が後回しなのよ！」

「ふふふ、おっこちゃん可愛いから仕方ないね。」

「じゃあケータイ貸してごらん、

今のおっこちゃん撮って送ったげるから。」

「えっ、い、今、おじさんとつながってる写真ですか……？」

「大丈夫だよ、僕はほとんど写らないようにするから(笑)

ほら、もつと可愛い顔してごらん、おっこちゃん。」

すてきな！

すてきな！

「あん……？」  
「あつ、あつ、そんなあ……！」  
「そ、そんなに動いたら、エッチな顔になっちゃいます……！」  
「良いよ、ウリケン君におっこちゃんのエッチなお顔を  
見せてあげよう、それじゃあ撮るよ。」  
「はっ、はい……！」  
「あん……！」  
「パジャマッ！」

「送信」と……わ、もう返ってきた(笑)」

「必死すぎ！サイテー！」

「まあまあ、はい、出てあげて。」

ピッ！

「もしもし！？」

「おっ、おっ、おまえ……！」

あ、ありがとな！

「じゃあ今から俺のチン……！」

「それで良いでしょ！じゃーね！」

ピッ！



ピッ、ピッ、ピッ……！！

「早いよおっこちゃん(笑)」

「ウリケンのちっさなおちんちんの写真とかいりませんし！」

「っていうか旅館の話はどこにいったのよー？」

「あはは、でもあんまり素っ気なくしてると、

連絡取りづらくなっちゃうよ？」

「良いです、もうアドレスも消しちゃいましたから。」  
「えっ、「これで最後」って、写真じゃなくて、連絡?」

「そうですねよ!女の子の裸の写真  
欲しがってばっかの男なんて、要りませんから!  
ゲンメツしました!」

「たはは、これは厳しい、可哀想なことしちゃったかな。」  
「自業自得ですよ、自業自得!  
前はもっと気になったり、胸がきゅんってする感じだったん  
ですけど、今話したら、ぜんぜん!ただの男の子でした!」



「あ、完全に終わっちゃったね、それ。」

「はい!いっさい未練ありません!

あたしにはおじさんがいてくれればそれで良いです!」

「よおし、じゃあおっこちゃんの新彼氏として、

いっばい気持ち良くしてイカせてあげるからね!」

「は、はい!お願いします!」

「いっばい、きてください!」

「あっ!」  
「ああん!」  
「おっこちゃん、おっこちゃん!」  
「あ、あ、あああ!」  
「おちんぽ深い!」  
「グーッ!」



ずちっ!

ずちっ!

ずちっ!

「いいいいですっ、あたし、もうイキそう!」  
「僕もだよ、一緒にイこう、おっこちゃん!」  
「このまま妊娠種付け決めるからね!」  
「はっ、はいいい!」  
「だして!」  
「赤ちゃん汁決めてええ!」  
「ああああ!」  
「イクッ!」  
「グーッ!」



「あきやああああああ〜!」  
「くおおお、気持ちイイッ!」  
「おっこちゃんのおまんこは僕だけのモノだあ〜!」



「あああん〜!」  
「好き〜!」  
「僕も大好きだよ、おっこちゃん〜!」  
「あ〜!」





「無事に全ての撮影は終了!」  
しばらくして第二弾の本とDVDが  
春の屋に贈られてきました!」

「それには美しく撮られた春の屋と  
おかみであるおばあちゃんが紹介されていて、  
そしてそれとは別に、  
「がんばる若おかみ」として  
あたしの特集が組まれていました。」

「写真にはあたしとおじさんが一緒に写っていて、  
インタビューとかちょっと恥ずかしかったけど、  
とっても綺麗に撮ってもらっていて嬉しかったです!」

「ウリケンにも見せてあげようかと思っていただけ、撮影が終わった後に番号表示の電話に出たら、それがなぜかウリケンで、前よりももっとうるさくなっていたので、なんかちよっとイヤになっちゃいました。」

「写真がどうこうって……だからあたしはそんなの、送らないって！撮影中の着信の数もすごくて……ちよっと疲れるかも……。」

「アドレスもなんか消えちゃってたけど、まあ、彼氏……だったのかな……。ちよっとよかったのかなあ。」

「おじさん、また来てくれないかなあ。」



「みなさんおはようございます！」

春の屋では今日も朝早くから撮影が行われるんです。

でも前日にがんばりすぎたせいか、

目が覚めたらちよっと時間を過ぎてしまっ……！

急いでお布団から出て、準備をしないと！」

「やあ、おはようおっこちゃん。」  
「あっ、おじさん、おはようございます！  
すみません、起こしてしまいましたか……？」



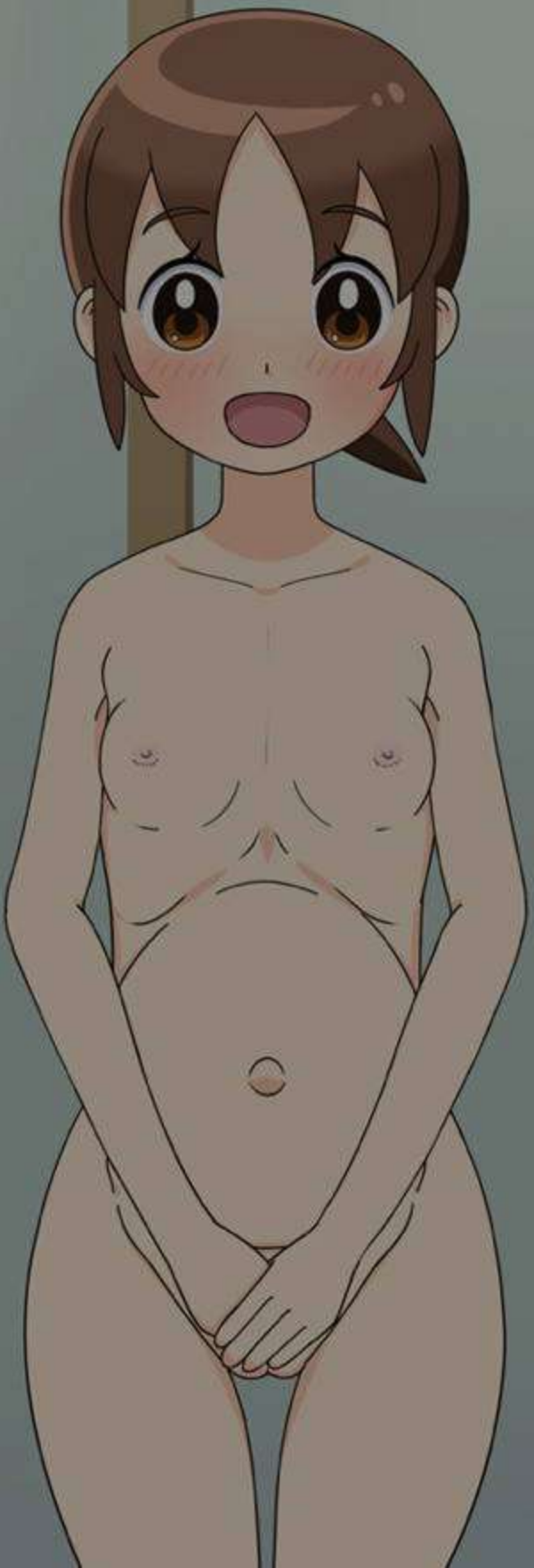
「いや良いんだよ、僕ももう起きる時間だったからね。  
それにおっこちゃんがいらないお布団じゃ  
寝ても仕方ないからね。」  
「あはは、ありがとうございます！」

「前回の撮影から三ヶ月くらい経ったころ、突然あたしは原因不明の体調不良に襲われたんです。」



「ご飯を食べていると急に気分が悪くなったり、それなのにお腹周りが少し太ったり……。病院にいったお薬をもらっても、ぜんぜん良くなるなくて……。』」

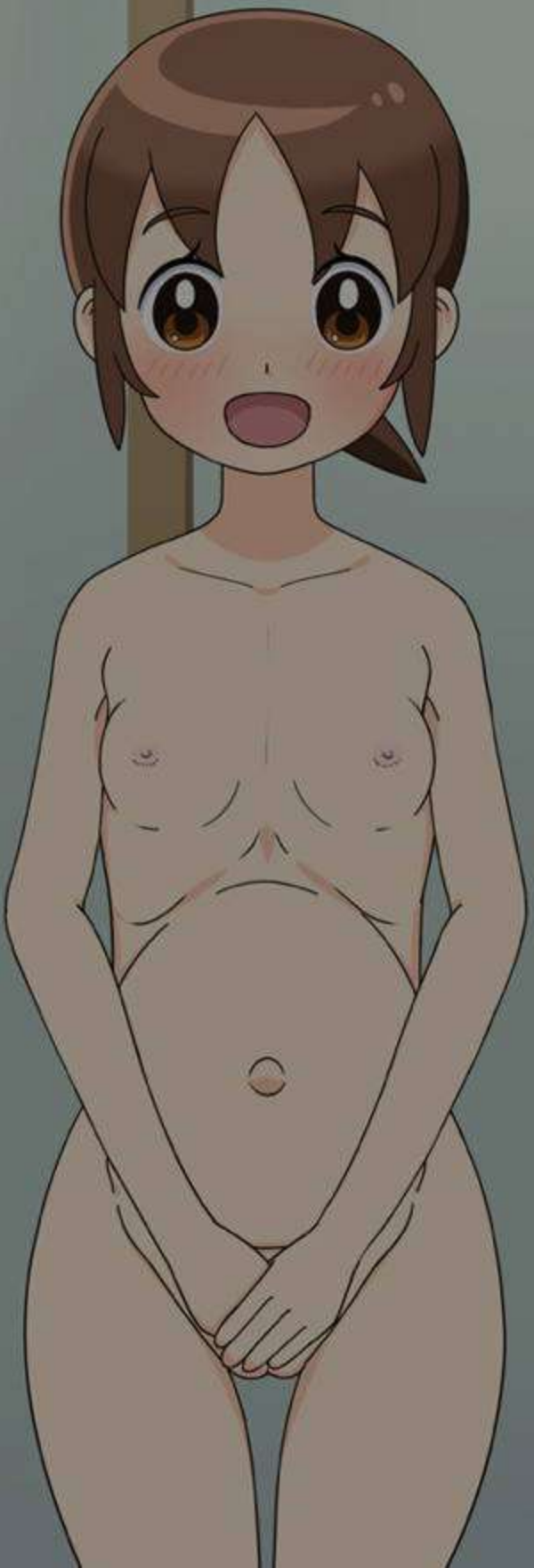
「そんな時、あたしの安否を気づかったおじさんが、いきなり春の屋に現れたんです！」



「連絡をしていたわけでも体調のことを話したわけでもないのに、そのタイミングで、ただあたしに会いにわざわざ来てくれた……。なにか、心が通じ合ってるような気がして……。とっっても嬉しかったです……！」

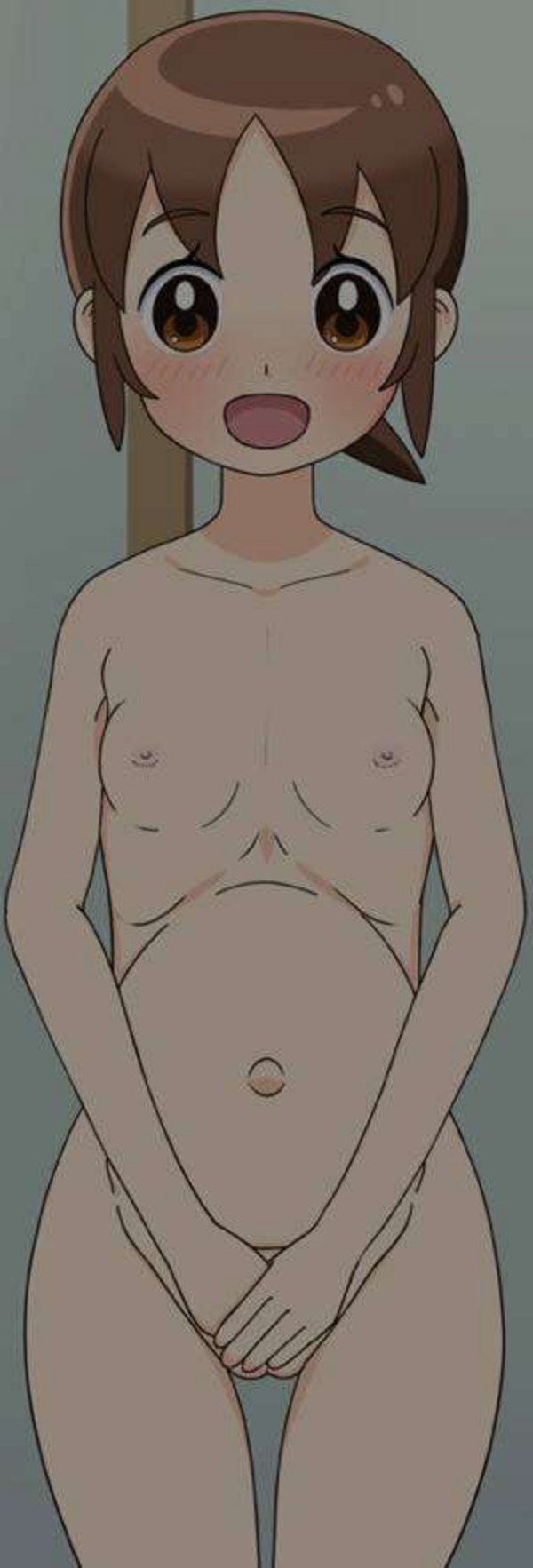


「おじさんが来てくれて心が明るくなったら、  
不思議と体調が悪いのも治まったんです。  
も、もしかしたら、こいわずらい？って言うのだったのかも、  
しれません……！」



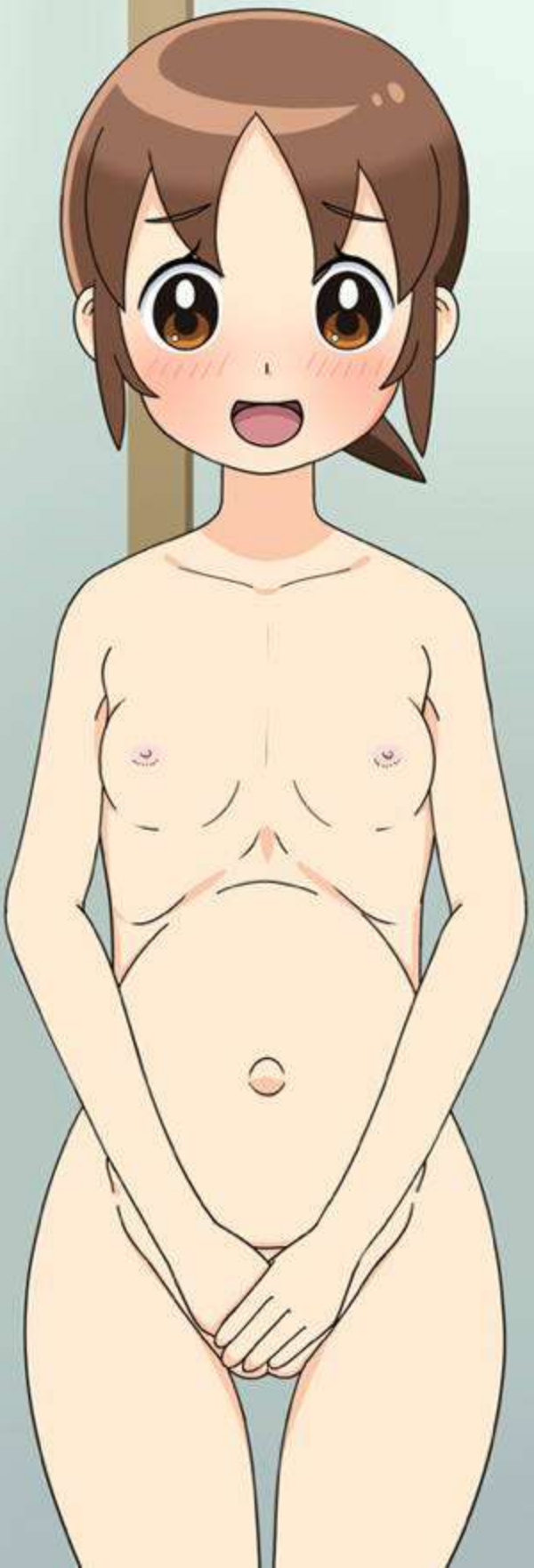
「その後で、おじさんが妊娠してるんじゃないかって言うから、  
そんなわけないと思っただけど妊娠検査薬を使ってみたら、  
なんとそれが大当たり♡！  
あたしはおじさんの赤ちゃんを妊娠していったんです！♡  
お医者さんでも分からなかったことなのに、  
おじさん、本当にすごいです！♡」

「もしたらおじさんが、  
どうせ春の屋に来たのだからと、  
長期にわたるPRビデオの  
第三弾を提案してくれました♡」



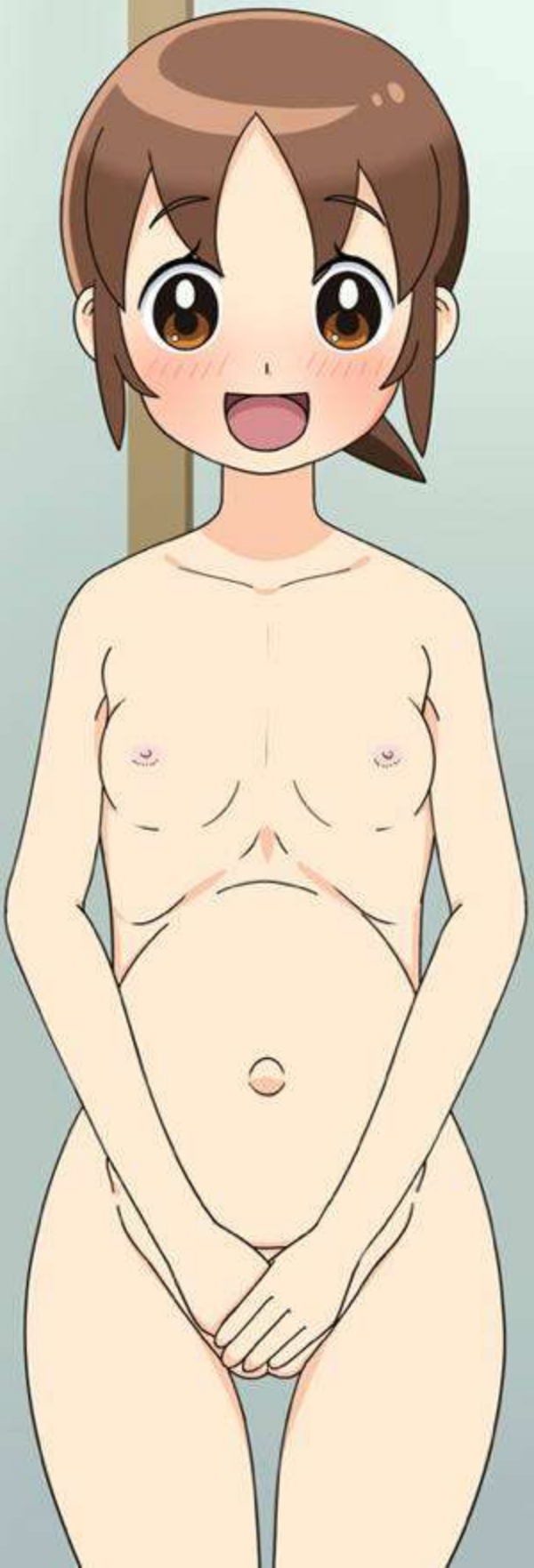
「今あたしは妊娠のお礼として、  
その撮影にのぞんでいるんです!♡」

「うーん、すっかりお腹も大きくなっただねえおっこちゃん。  
おっはいも少し膨らんだかな?」  
「は、はい!でも、もう少し大きくなってくれないと、  
赤ちゃんにあげるミルクが  
足りなくなるんじゃないか、心配で……。」



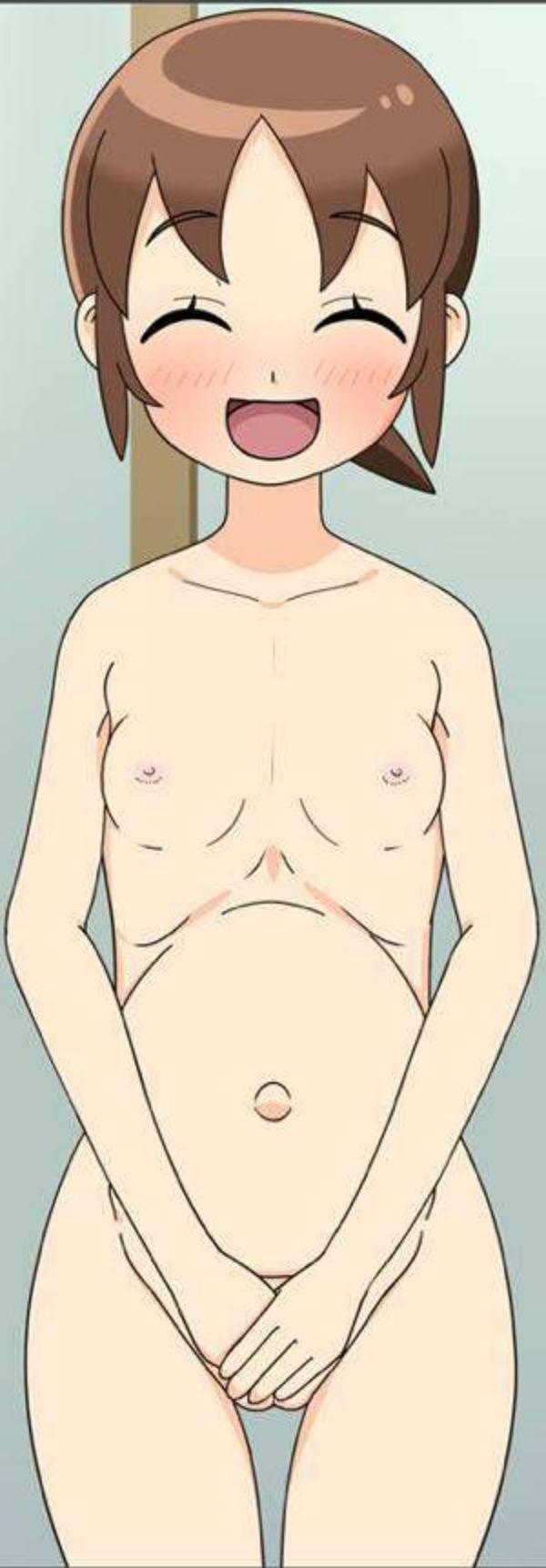
「おっこちゃん、赤ちゃんだけじゃなくて、  
僕の方も用意してくれないと困るからね?」  
「そ、そうでした!もう、おじさんったら、  
赤ちゃんみたいなこと言うんですから……!!」  
「ふふふ、僕も大好きだよ、おっこちゃん。」

「それじゃあ今日の撮影も  
あんまりおっこちゃんとお腹の赤ちゃんに負担が  
かからないよう、優しくしていくからね。」



「すみません、お気を使わせてしまって……!!  
その分、精一杯サービスさせていただきますからね!!」  
「よし、期待しちゃうよ!」  
「それじゃあ朝イチの撮影、始めるよ。」  
「はい!よろしくおねがいします!」

「おはようございませすお客様♪  
妊娠若おかみの添い寝サービスはいかがだったでしょうか、  
よくお眠りいただけましたでしょうか?」



「臨月近くになれば母乳も出ますので、  
ご希望の方には授乳もさせていただきます♪  
あたしが身ごもってからしばらくだけの  
特別サービスでございませすので、  
もし機会がございませしたら、ぜひご利用くださいませ♪」

「ハイオッケー！妊婦若おかみいただきました！  
良かったよ、おっこちゃん！」  
「ありがとうございます！」  
「でもだめですよ、あたしのサービスは全部、  
おじさんだけのものなんですからね！」



「ははは、みんな分かってるよ。  
これはあくまでAV用の撮影だからね。  
でももしかしたらこのビデオを見た人が  
おっこちゃん目的で来ちゃうかも知れないね。」  
「ええっ！そ、それはいやですよおっ……！」  
「ははは、よし、じゃあ今日も一日よろしくね、  
おっこちゃん！」  
「はい！よろしくおねがいいたしますっ！」

「あつ、あつ、あつ！」  
「きもちいいですうう……！」  
「浅めで細かく突かれるのも  
大好きだもんね、おつこちゃんは。  
「は、はい！」おじさんに開発されて、  
大好きになつちやいました！」

ずちっ！

ずちっ！

「……ら……  
僕のせいにしたらいけないぞ、  
おつこちゃんが  
おちんぼ大好きなのは、  
おつこちゃんが  
エッチだからなんだから！」  
「は、はいっ！」  
「ごめんなさいっ！」  
あたしはエッチが大好きな、  
1 学生の若おかみですうう！」

「そういういえば最近ウリケン君とは  
どうなったんだい？」  
「えっ？あれ、そういういえば、  
最近ぜんぜん連絡取っていませんでした。  
でももう、アドレス消しちゃったんで  
連絡着ても分かりませんし……。」  
「どれどれ、あれ、誰からか着信は  
ずつと来てるじゃない、すごい数だねこれ。  
もしかして全部、ウリケン君かな？」

「あ、あんまり多いんで、  
気にしなくなっちゃってました……。」  
「なら僕のこととか知らせてないでしょ、  
向こうはまだおっこちゃんのことを  
自分の彼女だと思ってるんじゃない？」  
「あっ、そうですね、  
そうかもしれないですね！」  
「じゃあここで一応  
ウリケン君にも連絡しておこうか、  
教えないのは可哀想だから  
おっこちゃんのをケータイでも  
挨拶を撮影して送ってあげよう。」  
「あ、はい、分かりました！」



「あつ、こ、こんにちは、ウリケン、  
久しぶりだね、元気だった？  
あつ！？！あんっ！  
れ、連絡しなくて、ごめんねっ！  
あ、あたしね、ウリケンのことっ、  
んううっ！  
い、今でも、とっても、  
好きっ……だよおっ……！  
んくううっ！  
でもこの人……おじさん、  
すごく優しくって……！  
見て分かると思うけど、  
このおっきなおちんぽ……！  
これであたしのおまんこ穴、  
ずぼずぼされると、とっても……  
き、気持ちいいのおおっ！」

「ほら、お腹の中にはこの人との  
あかちゃんか……！  
元気いっばいに育って、  
もうすぐ産まれるの……！  
仕方ないよね……！  
だつておじさんとのエッチ、  
気持ちいいんだもん……！  
う、ウリケンが送ってくれた  
写真のおちんちんとは、  
ぜんぜんちがくてえ……！  
だ、だからあたし、その、  
あつ、あのね、あの……！  
う、ウリケンとは……！」



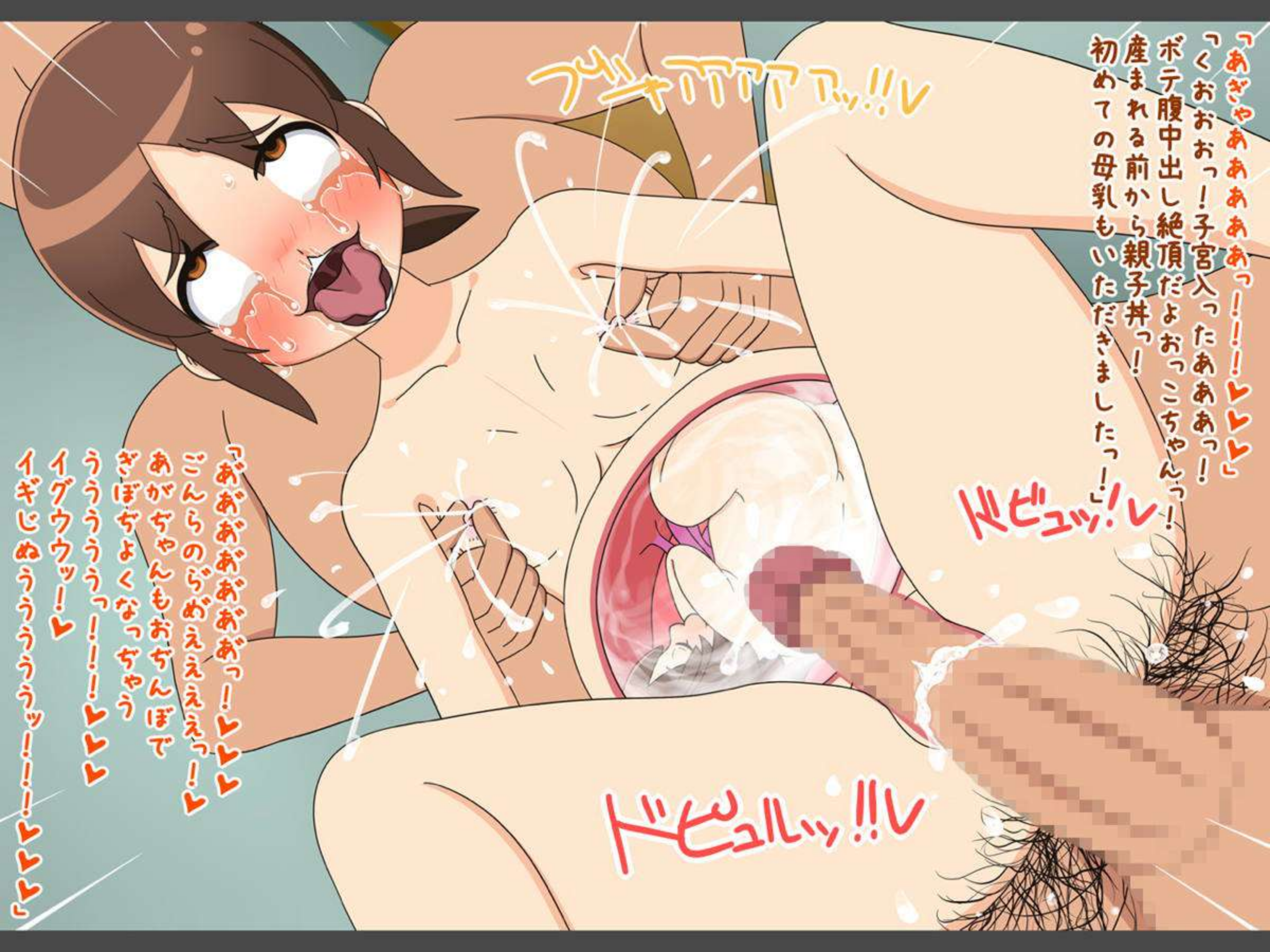
「あぎやああああっ!!!!」  
「くおおっ!子宮入ったああっ!  
ボテ腹中出し絶頂だよおっこちゃんっ!  
産まれる前から親子丼っ!  
初めての母乳もいただきましたっ!!」

「ビュッ!!」

「アッアッアッ!!」

「ビュッ!!」

「ああああああっ!!」  
「ごんらのらめええええっ!!」  
「あがちゃんもおちんぼで  
ぎぼちよくなっちゃう  
うううううっ!!」  
「イグウウッ!!」  
「イギじぬううううッ!!」





「ああ、ウリケン君のこと、僕も完全に忘れちゃってたよ。ケータイの撮影も回りっぱなしだ、どうしょっか？」  
「いいいですよ、もう、きにしないで……」  
「それより、おちんぽ……！」  
「じゃあおっこちゃん、最後にウリケン君にさよならの挨拶をしてあげて。一応彼氏だったんだから。ほら、カメラに向かって両手でピース。」

「あ、は、はいっ」  
「う、ウリケン、たぶんぜんぜん伝わってないと思うけど、あたし、おじさんのおチンポ大好きなのっ」  
「いつでもこのおチンポはめはめしてもらっていたいし、今だっ、早くあいさつおわらせてさっ、くすのっ、ブキしたいのっ」  
「だからもう、いきなりうちに来たりしないでねっ」  
「あたし、おじさんのあかちゃんいっ、ぱいうんで、はるのやでしあわせになるからあっ……」  
「ウリケン、じゃあね、さようならあっ……」





「はあ、はあ」  
「ま、また赤ちゃん、お腹けたあ」  
「お母さんに似て元気なんだね、  
もう準備もできたことだし、それじゃあいってみようか。」  
「は、はい、わかりました……」

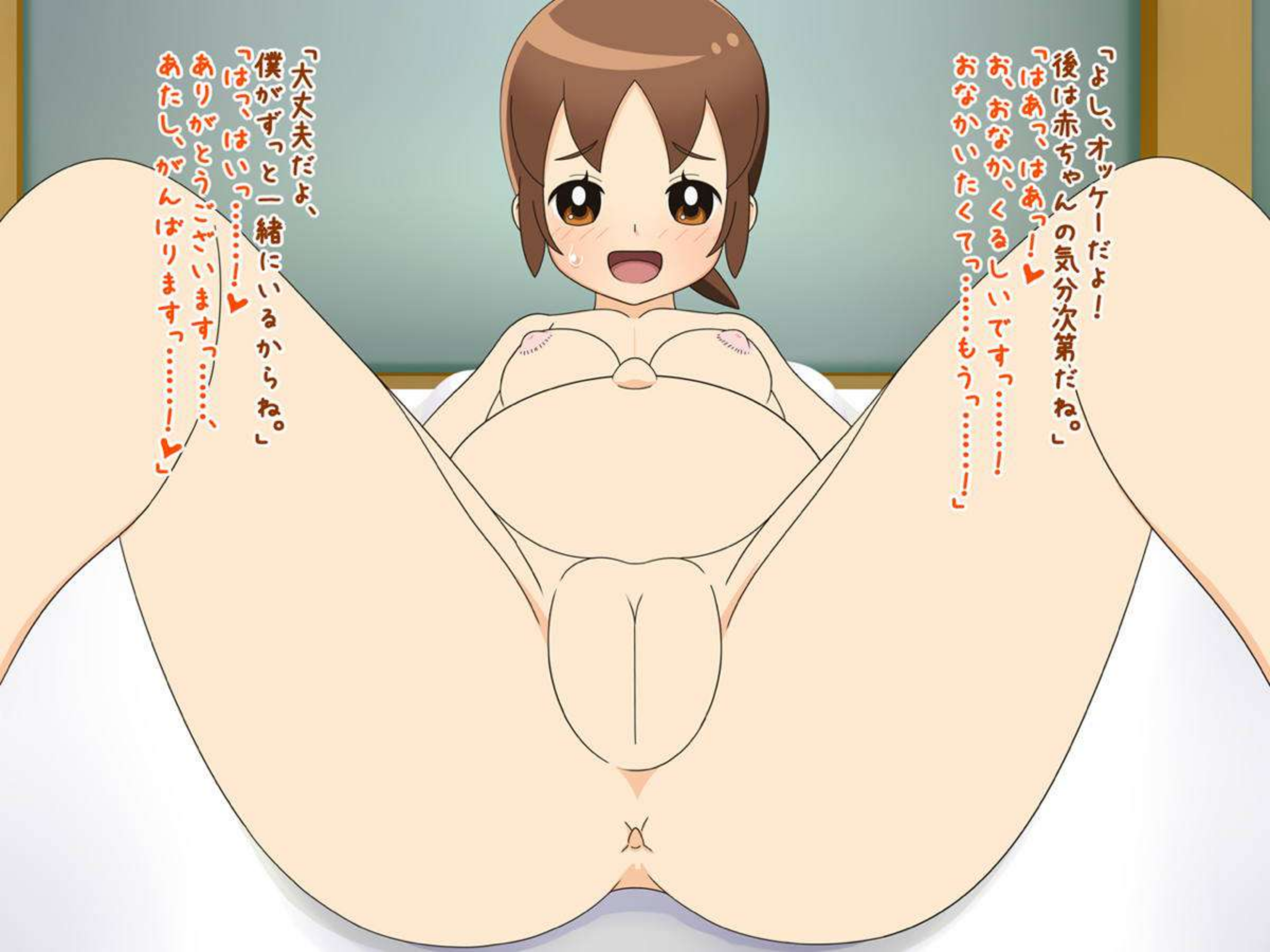
「み、みなさんこんにちは、  
春の屋の若おかみのおっこですっ」  
実は今日は、今からここで、  
初めての出産を行いたいと思っていますっ  
みなさんのおかげで無事に、  
出産予定日を迎えることが出来ましたっ」

「今日はおじさんにあたしの出産の様子を  
全て撮影していただきますので、  
あたしがあかちゃんうむところを  
最初から最後まで、  
ぜひみなさんも見守ってくださいねっ」



「よし、オッケーだよ！  
後は赤ちゃんの気分次第だね。」  
「はあっ、はあっ！」  
「お、おなか、くるしいですっ……………」  
「おなかいたくてっ……………もうっ……………」

「大丈夫だよ、  
僕がずっと一緒にいるからね。」  
「はっ、はいっ……………」  
「ありがとうございますっ……………」  
「あたし、がんばりますっ……………」



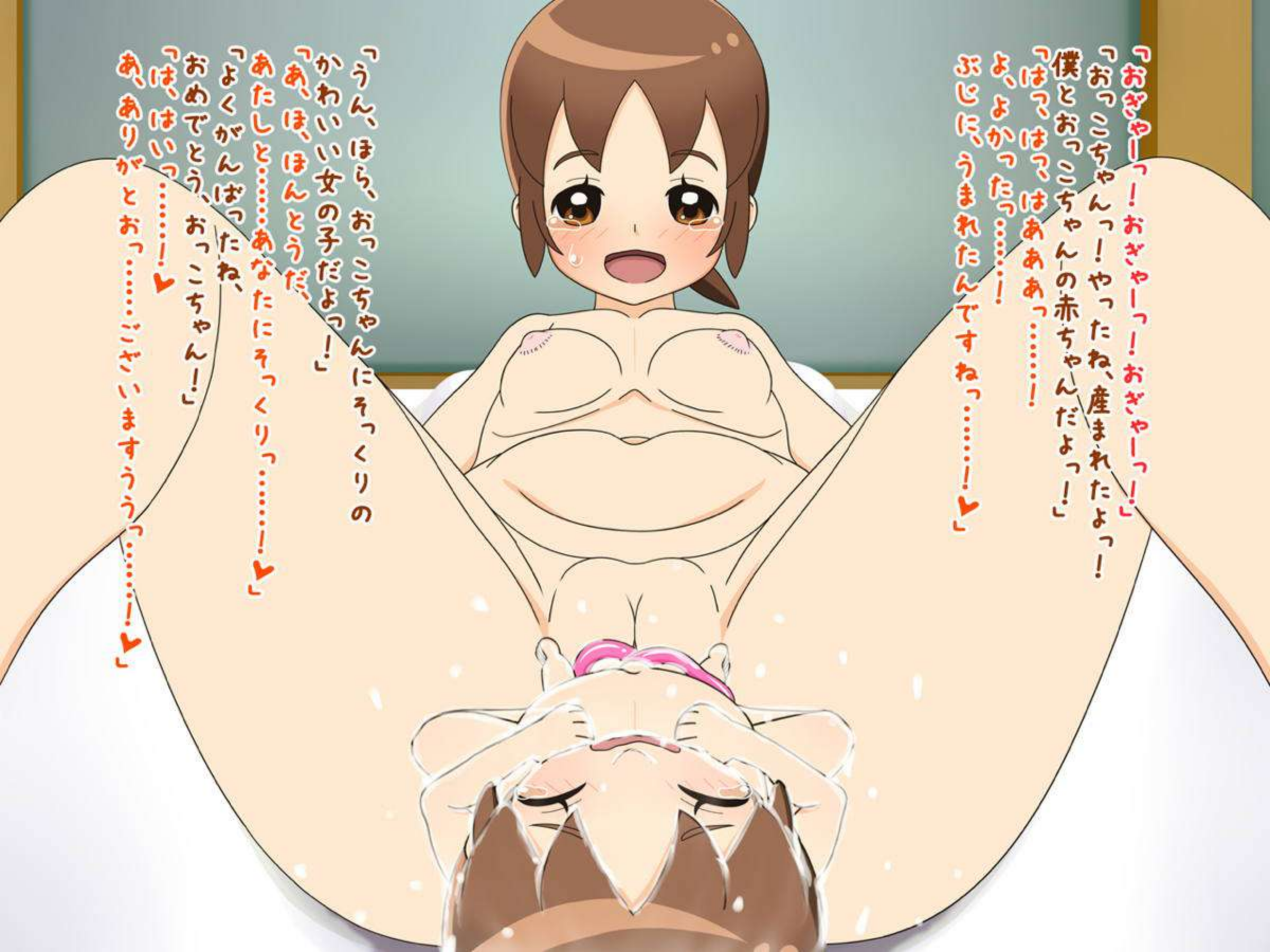






「おぎやー！おぎやー！おぎやー！おぎやー！」  
「おっこちゃんっ！やったね、産まれたよっ！」  
僕とおっこちゃんの赤ちゃんだよっ！」  
「はっ、はっ、はあああ……！」  
よ、よかった……！」  
ぶじに、うまれたんですね……！」

「うん、ほら、おっこちゃんにそっくりの  
かわいい女の子だよっ！」  
「あ、ほ、ほんとうだ、  
あたしと……あなたにそっくり……！」  
「よくがんばったね、  
おめでとう、おっこちゃん！」  
「は、はい……！」  
あ、ありがとおっ……こちゃん……！」



「おぎやーっ! おぎやーっ!」  
「おっこちゃんも無事に済んでよかったよ。  
おっこちゃん、お母さんになったんだよ。」  
「あっ……あ、あたしが、お母さん……っ?」

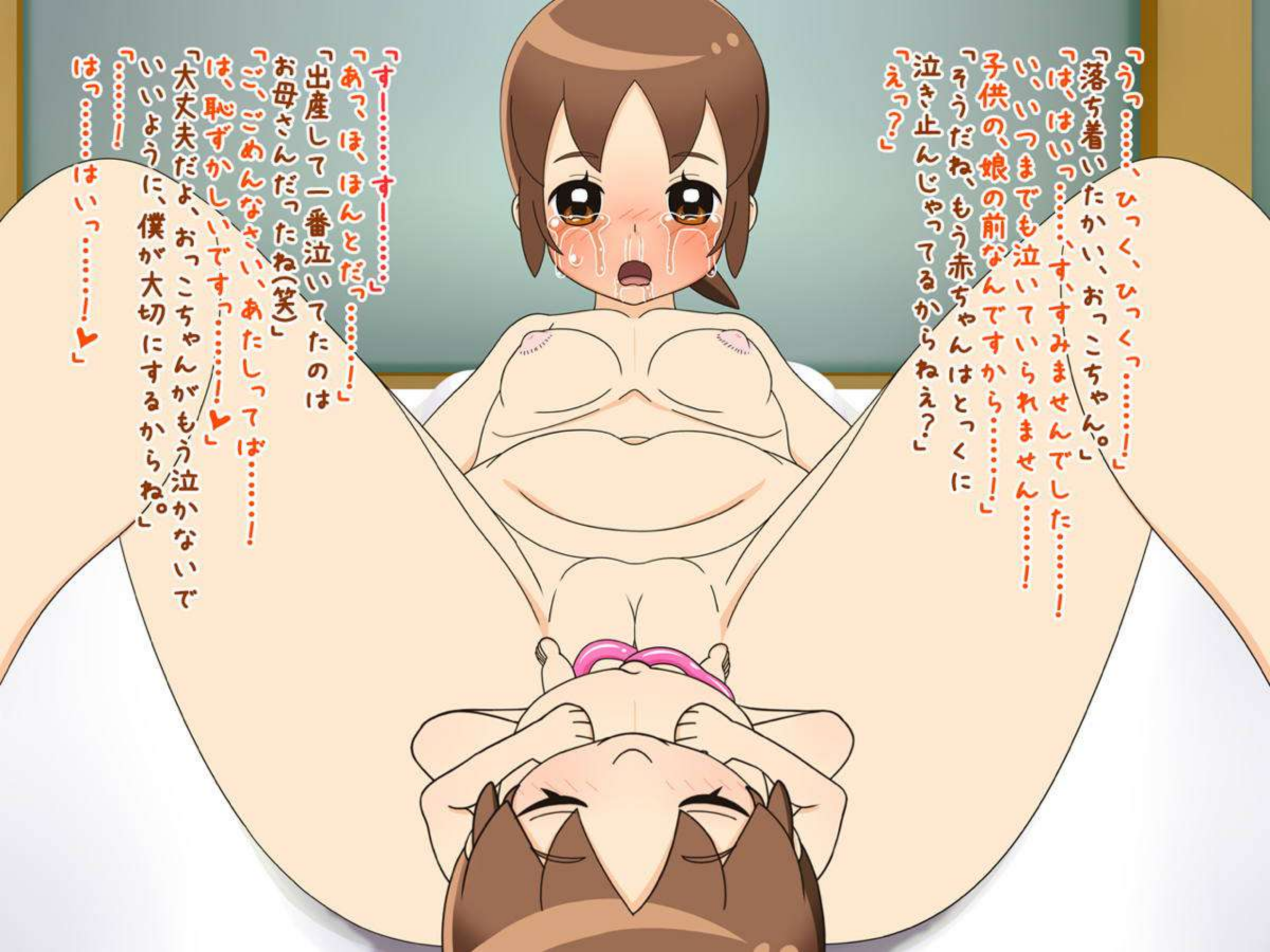
「あれ、あんまり意識してなかったんだ?  
そうだよ、おっこちゃんがこの子のお母さん、  
だからこの子が将来の、春の屋のおかみさんだね。」  
「お母さん……っ?」  
「この子が春の屋の……おかみさん……っ?」





「うっ……、ひっく、ひっく……!」  
「落ち着いたかい、おっこちゃん。」  
「は、はいっ……、す、すみませんでした……!」  
「いいつまでも泣いていられません……!」  
「子供の、娘の前なんですから……!」  
「そうだね、もう赤ちゃんはとっくに  
泣き止んじゃってるからねえ?」  
「えっ?」

「す……す……!」  
「あ、ほ、ほんとだっ……!」  
「出産して一番泣いてたのは  
お母さんだったね(笑)」  
「ご、ごめんなさい、あたしってば……!」  
「は、恥ずかしいです……!」  
「大丈夫だよ、おっこちゃんかもう泣かないで  
いいように、僕が大切にするからね。」  
「……!」  
「は……はい……!」





「ふ、ふつつかもものですが、  
これから、  
よろしくお願いいたしますね……!」



「長い時間をかけた春の屋PRビデオ・第三弾の撮影も全て無事に終了し、おじさんは帰っていききました！  
いつの間にか妊娠して  
誰の子か分からない赤ちゃんを産んでいたあたしは、  
それから学校に春の屋に子育てで大忙し！  
でも周りのみんなもなんですけど、特に撮影以外でも  
頻繁に春の屋へ来てくれるようになったおじさんが、  
あたしを優しく支えてくれるから、大丈夫なんです！」

……まるでこの子の、本当のお父さんみたいだ……。

ほ、本当に、そうなっただけなら、  
あたしは嬉しいんですけど……！な、なんちゃって……！  
また第三弾以降もおじさんの新作の撮影は行われて  
いるんですけど、その度に案内が大変なんです！  
なにせ撮影期間中は、毎日朝から晩まで、  
ずっつと撮影をするんですから！  
でも春の屋のため、子供のため、おじさんのために、  
若おかみとしてがんばります！」

「おじさんの撮ったPRビデオはおかげさまでどれも大好評！」

今では多くのお客様で

毎日春の屋は大盛況です！

しかも最近ではそのうわさが

海外にまで広がっているらしく、

外国の方もよく泊まりに来られます！

PRビデオを作ってくれるおじさんと、

応援してくださるみなさんのおかげで、

花の湯温泉がどんどん

にぎやかになっていっています！

いまやおじさんは春の屋だけでなく、

花の湯温泉全体にとって

なくてはならない存在になっていきます！

そ、それでも本当は、はじめに案内した、私だけのおじさんなんですけど……！

それで実は今、おじさんから

ある提案をされているんです！

なんと、もしかしたら近いうちに

親子共演が果たせるかも！？

今はおばあちゃんとおじさんが

おかみと若おかみとして一緒に

紹介されている所に、今度はこの子が

若おかみとしてのるのかも……！

今からとっても楽しみです！

またおじさんのご好意で、今度撮影に

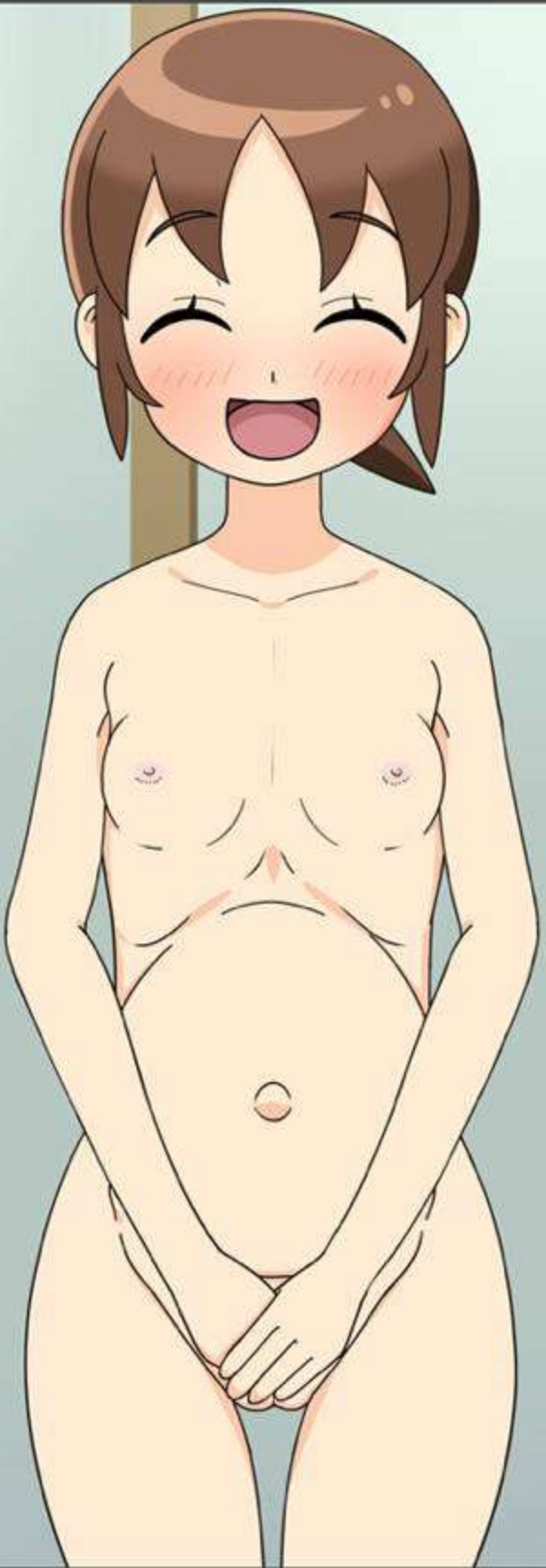
同じ花の湯温泉にある秋好旅館の

あとつぎの秋野真月ちゃんも

誘ってみようと思っています！

楽しみにしていてくださいね！」

それでは今回はこのあたりで！  
ご視聴、ありがとうございます！



春の屋・若おかみの関織子でした！  
みなさま、またのご来館をお待ちしております！

終